
異世界な物語

月野 針鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界な物語

【Nコード】

N7764G

【作者名】

月野 針鼠

【あらすじ】

始末屋として働いていた、厄介事に巻き込まれる不幸な性を持つ俺に、更なる不幸が襲い掛かる！

第零話 プロローグ

異世界入りした奴の気持ちってわかる？

悪いが俺はわからん。

よくあるのは、異世界の奴から呼び出されて『世界を救ってください！』とか言われたり、異世界に迷い込んで、『なんかよく分からんが世界を救いました』ってやつだ。たまに最初は『嫌だ』って言うけど、成り行きで世界を救いました。ってやつもあつたな。

正直に言おう。やっぱりそいつらの気持ちに分からん。

よく思うが、異世界入りって遠まわしに「お前死んで」っていわれてる気もしないか？異世界ってはっきり言って命が幾つあっても足んないもん。

それが分かっているのにわざわざ厄介事に首を突っ込むのはなぜだ？やっぱり成り行きか？

それでも、厄介事に首を突っ込まなくても巻き込まれる奴だっているんだぜ？

そう。俺みたいな奴のことだ。過去にあつた悲劇。

例1：バスジャックに遭いました。あれはまずかつたね。マジ死ぬと思つたよ。

例2：銀行強盗に遭いました。まあバスジャックよりはマシだった。

まだ他にもあるけど、長くなるからやめる。

そして、巻き込まれたんだけど結局いつも俺が処理してんだよね。

全く、面倒くさい事は他人に任せやがって。厄介事の後処理ってのは大変なんだぞ。

俺の立場になってみる、絶望するぞ。

勉強も嫌だけど、こっちも嫌なんだよ。ちゃんとテストではいい点出してるけど。

今回は、銀行強盗の後始末。今、街で銀行強盗を追つてゐる。

人の始末とかではない。霊の始末とか警察が大きな事件で忙しいと
きに始末の仕事をする。

始末屋は基本的に政府から依頼された仕事をこなしていく。中には一般の人から仕事を貰う始末屋もある。家がそうだ。

始末屋は政府からの依頼を受けることもあり、帯刀の許可も始末の仕事中は下りている。

さらに始末屋の人間は超能力を持っている。

例を挙げれば、火を操る能力。他にも水、風、土、雷などがある。

闇や光だってあるそうだ。

ちなみに俺は風系統の能力者である。

風系統は、身体能力強化、遠隔攻撃などのまあ…悪く言えばチートを使う。

ちょうど今、警察は、隣町の大きな事件に加勢しに行っている。

当主は、俺の兄だ。親父は…今日は多分、始末屋のことで政府に顔を出しているだろう。

家の当主の兄は、かなり大雑把だ。雑用は親父と俺に任せてる。

兄は仕事行つて、サインして、寝てるだけ。ただし実力は折り紙付き。日本でも五本の指に入るそうだ。

街のはずれまで来た。人はもういない。銀行強盗まで、残り5メートル。

「そろそろいいかな」

俺は、背負っていた竹刀袋から、愛刀《蓮華》を取り出した。

蓮華は、日本刀で柄は赤く、刀身は白銀。

俺は、足に思いきり力を入れた。

力の使用。始末屋の人間すべてが持っている超能力。始末屋人外であり、ほぼ全員無駄に強かったりする。

俺は、風系統の力を使う。

そして、瞬く間に距離を詰めた後、蓮華を振り下ろす。

あ、もちろん峰だよ。

ドカツ！と硬質な音がした。

銀行強盗は倒れ、その場に崩れ落ちる。

「ふう。終わった」

俺は仕事を終えた。報酬の方ももう受け取ったそうだ。

俺は家に帰り、明日のために早めに寝た。明日は学校だ。

明日は何もありませんように。

何処だここ？

これって夢？

そんなはずない。俺は学生服だ。登校中だ。右手には学生鞆。左肩には竹刀袋だ。

じゃあどついうことだろう。

目の前には、獣道。

俺は、路地裏に入っただはずだ。仮に違っても街に獣道なんかない。

繰り返す。ここは何処だ？

第零話 プロローグ（後書き）

初めまして。はりねずみです。

プロローグを無事書き終えました。

あまり進んでおりませんが。（笑）

これからペースアップしていきます。

感想よろしく願います。

* 1～2日に1話は更新していきたいと思えます

第一話 獣道と村

マジで此処は何処だよ。前を見ても獣道。後ろを見ても獣道。ろ、路地裏つて獣道につながってんだな。初めて知ったよ。

き、キツイぜこれ。路地裏入ったら獣道つてどうよ？ありえねえよ…

不幸ってレベルじゃねえ。マジやめてこれ。そうだ！これは夢だ！うん！そうに違いない！

頬をつねる。痛え。やっぱ夢じゃねえのか。しかしどうしようか。俺はあいにく某眼鏡少年のように『助けて〜ドラ。も〜ん』みたいな見たいな真似は出来ん。

待て！落ち着け。俺。軽く状況確認だ。

1：朝起きました。

2：学校に登校する為に着替えます。ちなみに夏服。カッターシャツに黒いズボンと言う一般的な制服。

3：登校します。

4：近道をするため路地裏に入りました。

以上。

と、とりあえず前に進もう。路地裏に戻ったりするかもな。

俺はただ歩いた。緩やかな斜面が続いた。山かな？ここ。

山だったら山だったで困るよ。路地裏に戻れないじゃん。

つーかここ異世界だったりして。そしたら…喜べねえな。嫌な予感としねえし。

どうしようかなんて考えていると・・・

「グルウウ」

とかいう唸り声。嫌な予感。声の主を探ると狼でした。

あれ？ニホンオオカミって絶滅したんじゃないかなかったつけ？

はあ。またか。どうしてこう厄介事ばかり…

仕方なく戦闘態勢に入る。蓮華は抜かない。犬とかなら素手でも倒せるから。

狼が飛び掛ってきた。まっすぐだ。

かなり遅い。俺は、突進してきた狼をひよいと避け、背中に手刀をいれた。

ボキィ！と音が鳴り、狼の背骨が折れる。

加減はしない。というかできない。俺はそこまで強くないから。

狼は崩れ落ちた。

俺は狼を放って再び前に進む。前に進む理由は、まあ、後ろに行っても前に行っても変わらない気がするからな。

そういえば朝食抜きだった。腹が減ったな。

俺は鞆の中から力。リーメイト（チョコ。レート味）を取り出し食べた。

ゴミはちゃんと鞆の中に入れたよ。ポイ捨てはいかん。

弁当は作る時間がなかった。少し寝坊したからな。

お金もある。ちなみに二千元。まあ、異世界だったら役に立たねえけどな。

二十分くらい歩いた。すると、路地裏には着かなかったが村に着いた。昭和初期の日本ような村だった。

見る限りは電気や水道は通っていないようだ。

100%木製の家。

井戸もある。

村の所々に木も生えている。

こういうところに住むのも悪くはないかもな。

しかしおかしい。

村人が誰一人としていない。皆、農業に従事しているのだろうか？子供もいない。どういうことだ。人はちゃんと住んでいる感じはする。

井戸を見てみると、ちゃんと生きている。

村の外れまで来ると…

「ヒヤハハハハ！犬ころ一匹逃がすな！」

とかいうありきたりな台詞が。

「はあ。早速厄介事に巻き込まれた」

と言いながらも、声のする方に行く俺だった。

始末屋の性って怖いねえ…

第一話 獣道と村（後書き）

第一話更新

主人公が異世界入りして喜べない理由はプロローグを御覧下さい。
すいません。主人公の名前考えてませんでした。

というわけで主人公の設定の発表

名前 銀星彗駆（スイカ）です。

銀髪（白髪）です。

瞳の色は水色です。

かわいそうな子です。

こんな感じ。

でわ。

ばいに

「ちょっと待てい！俺の名前考えてなかっただ！ふざけるなよダメ作者！」

「やべ。さっさと逃げよ」

「逃がすか！」

第二話 VS盗賊

はあ。俺（彗駆）は溜め息をついて、様子を見た。

視認できるので、いい感じの木の陰に隠れて様子を伺った。二十メートル位先で十五人位の盗賊といや山賊か？と三十人位の村人が何やら言い争っている。

おかしい…追い詰められている村人側には子供がいない。普通の異世界のゲームなら、ここで子供が泣き叫んで、『やめてくださいこの子はまだ子供なんです。』『うるせえっ！』っていう場面じゃないのか。

だが子供がいない。子供のいない村というのはあるのか？普通ねえよな。まあここ異世界かもしれないし、そんなの分かんねえけど。

しかしおかしいのは本当だ。盗賊の服には、血が全くついていない。背後からでも分かる。

俺が村の東の森の方をを向くと、三丁四十メートル先から、五人の盗賊がこちらに來ている。

仲間か。増えると面倒だ。

さっさと始末するか。

俺は、学生鞆を置き、竹刀袋から《蓮華》を取り出し、駆け出した。一瞬で、盗賊の目の前に行く。そして、真ん中にいた盗賊を蹴り飛

ばし、そこで身体を回転させる。

《風破刃》

俺を中心に、風が起こり、盗賊が吹き飛ぶ。斬撃の風だ。赤い血が舞う。

少し威力は抑えておいた。死にはしないだろう。

俺は元の位置に歩いて戻った。

マズイな。間違えた。あそこは一人一人確実に仕留めれば良かったが、風を起こしちまった。

あーあ。まあいいや。どうせ全員片付けるんだ。

俺は開き直ってやった。風に気付いた盗賊どもがこちらに来た。

「キャハハハハ！お前一人で何が出来る？ホレホレ、かかって来いよ」

あ、馬鹿だ。足を止めたぞ。しかも俺を見て笑ってる、

俺は、刀を横に薙いだ。

《風旋刃》

竜巻が巻き起こり、盗賊を吹き飛ばす。

「「「ぎゃあああああああ」」」

俺はどつかのヒーロー達と違って容赦なんかしないし、どつかのヒーロー物の敵の様に隙だらけでも黙ってみてるなんて真似はしない。鮮血が舞う。さっきよりは、強かっただろうが血の量が多い。

ひい・・・ふう・・・みい・・・あれ？さっきは十五人いたはずだ。一人足りない。

背後から殺気がする。マズイ。俺は足元に風を起こし、左に回避した。

ドゴォ！とさっきまで俺のいた場所に戦鎚が振り下ろされた。風圧で煙幕が吹き飛ぶ。

戦鎚をもった、奴はかなり大柄で眼帯をしている。盗賊というよりも海賊だ。後、何か獣臭い。

「兄ちゃんよお。仲間は何してくれてんだい？」

「仕方ねえよ。大体、最初からこういうことになる覚悟を少しはしてただろ？あと、それ背後から襲ってきた奴の台詞じゃねえよな」

「はっはっは。気に入った。おめえ俺の仲間になる気はねえか？」

ありきたりな勧誘だな。勧誘してきた盗賊の首領は獣臭いおっさんだぜ？仲間になる気なんて更に無くなる。

「嫌だね。俺は盗賊になる気なんかさらさら無い」

「チッ…しゃねえな」

おっさんは、戦鎚を振りかぶった。俺はバックステップで回避し、構える。

「逃げてばっかじゃ勝てねえぜ？」

「避けただけだ。大体おっさんこそ当てなきゃ勝てねえぜ。」

おっさんは、戦鎚を振りかぶって巨体に似合わぬスピードで突進してきた。

遅い。兄に比べると、止まって見える。

俺も駆け出した。

《烈風刃》

おっさんをすれ違いざまに切りつける。

おっさんと俺は武器を振り切った状態で立ち尽くしていた。

おっさんが倒れ、血が噴き出す。

急所は外した。死ぬ事はない。と思う。

さあ、後始末だ。異世界入りしていたとしても後始末はしっかりする。始末屋の悲しき性。

とりあえず盗賊を集め、いい感じの木に縄で縛り付けといた。

村を助け、後始末したのはいい事だが、どうしようか。

空を見上げて一つ。

はあ。空が青いなあ。

この後もまた、厄介事に巻き込まれるだろう。

第二話 VS盗賊（後書き）

はい。更新完了。

慧「今回戦闘ばっかだな」

作「そうだねえ。作者としては笑いを取りにいきたいけどねえ。お気づきでしょうが、慧^{スイ}駆は超能力者です。風系統の。」

慧「何で風？名前からだとか光とかだよな」

作「風が好きなんですよ」

でわ。

ばいに〜

第三話 また獣道へ…

俺は学生鞆を拾い、蓮華を竹刀袋に入れた。

騒ぎといえば騒ぎを起こしたために村人が集まってきた。

「ありがとうございます！なんとお礼すればいいか」

村長らしき人が話しかけてきた。

第一印象。髭、長っ！

「いや、お礼はいい。代わりに情報を提供してもらいたい」

「はい。お安い御用です具体的にはな…」

「おい！そこのお前！」

子供が走ってきた。五、六歳だな。背は1メートルもない。何て口の悪いガキなんだ。

「お前が盗賊か？成敗してやるっ！」

ガキが木の棒を持って襲い掛かってきた。どうする？

選択一覧

1：蹴る。

2：殴る。

3：とりあえず話す。

どれ？

勿論俺は、3を選んだ。

「待て。俺がこの村を助けたんだよ。大体、俺は盗賊に見えるか？」

「見える。だって変な格好だし」

俺の格好を変な格好って言われた。日本の学生の諸君どう思う？

「これは制服だ！」

「征服？分かったぞ！お前は…グヘエ」

ガキが村長らしき人に殴られた。おい、村長よ。村民にそんなこと
していいのか？

「いい加減にせんか！確かにこの人の格好は変かもしれないが、わし
らを助けてくださった人じゃぞ！！」

うんうんそうだ……いや待て。途中かなり失礼な発言があったぞ。

「チツ。分かったよ」

ガキは木の棒を捨てた。

「すみません。この子は後でしっかりしつけておきます」

ガキの親らしき人がガキの手を引っ張ってどこかへ行った。

「ゴホン！では先程の続きです。具体的には何を？」

「ここがどこか聞きたい。もう一つ。この近くに大きな町は無いかな？あと地図が欲しい」

「ここは、エルト大陸のテリィ村です。この村から南に半日ほど行つたところに町があります。地図はこれです。世界地図ですがよろしいですか？」

「ああ。構わねえ」

村長は懐から地図を取り出した。お前そんなところに地図入れてんのか？もう財布感覚だな。

俺は、地図を見た。おい。大陸三つしかねーぞ。

あーあ。本当に異世界だったなんてね。もう開き直ってやる。

「そうか」

俺は、村へ入ってきたところと逆に向かおうとした。

「そっちは北ですぞ」

「・・・・・・」

また獣道か。

面倒だな。

俺は、テリイ村から去った。

獣道にて――

俺は3時間くらい歩いた。

はあ。少し腹減ったな。

ソ。ジョイでも食べるかな。

(この人はか

なりまずい人で、只今千五百円分の力。リーマイトと五百円分のソ。ジョイを持っています。何故そんなに持っているかって？本人に聞きなさいっ！)

俺は、袋を開け、ソ。ジョイを口に運ぼうとしたとき…

じーーーーー

なんか視線を感じる。

マズイ…相手は、多分かなり食に餓えてる奴だ。

異世界に入った今、ソ。ジョイを確保できる保障は無い。ここで失う訳にはいかん！俺の腹の為にも！

じーーーーー

負けるな俺！

じ――――

負ける…な…

じ――――

――――

ダメだ…俺の負けだ…

こんな物欲しげな視線に勝てるのは、人間じゃない。残念ではないが俺は、人間だ。

とりあえず、視線の主を探すことに。

辺りを見回すと、左のいい感じの木に隠れながら十五、六歳の金髪の少女がこちらを見ていた。

俺は少女の所へ行った。

俺はソ。ジョイを持っている右手を出して、「食つか？」と聞こうとしたが、ガブツ！と右手ごと持ってたかれた。

「ぎゃあああああああああああー！！」

まあ叫んだよ。噛まれたんだ。痛えよ。

第三話 また獣道へ…（後書き）

更新完了！

今回はどうでしたか？

作者的には、結構頑張ったんですよ？

慧「おい！なんだよ！途中のまずい人って！俺は、カ。リーメイトが好きただけだ！俺はまずくない！」

作「結構まずいと思うよ？そんなに一気にカ。リーメイトとか買う人いないでしょ」

慧「いたよ！俺を越える10箱買ったやつ見たよ！」

作「それは、嘘だって！ちなみに何味が好き？」

慧「そうだなあ…」

作（よし！考えてる間に逃げよ。つーかそんなもんで悩むなよ。小説の主人公よ）

でわ。

ばいに！

慧「やっぱチヨ。レート味かな？あれ？あ！逃げられた！」

第四話 獣道で…

痛え。まだ内出血してやがる。

「すいません！」

「すいまして済むのか？この手は」

俺は、内出血を起こしている右手を左手で指しながら言った。

「いや。それすいせんって言いましたよ！それにお腹が空いて死にそうだったんですよ！」

「死にそうな奴ってちまちま食べるんじゃない？元氣ないから。つーか元氣でも手ごと食べる奴はいねーよ」

反論できなくなった少女は、俯いた。

なんかこっちが悪い気すらして来るな。これ。

まあいい。まだ俺には力。リーメイトがある！

「あの…もう一つ下さいませんか？その食べ物」

気に入ったのかそれともただ腹が減っているのかソ。ジョイを要求してきた。

「まあいいよ。ただし条件がある。この先に街があるはずだ。そこでお前に宿代を払ってもらう。ようは、今ここで金よこせってんだ」

「宿代払えるお金があつたら、死にそうになりませんよ！」

「それもそうか。じゃあ無しな」

「極悪非道！」

「金で食べ物を買うのは普通だろうが！」

はあ。疲れた。こいつの面倒を見るのはもう嫌だ。

俺は、ソ。ジョイを投げて言った。

「俺はもう街に行く。もう会うこともないだろ。じゃあな」

俺は軽く手を振り、歩き出そうとした。

「待って下さい。え、えっと私、アステルと言います！」

「あ、ああ。で。俺に名乗れと？」

アステルはコクンと頷いた。

「仕方ねえな。俺は彗^{スイ}駆^カだ」

「スイカ？何か変な名前ですね。変な格好してますし」

「オイ。まあ変な名前つてのは認めるが、俺ってそんな変な格好してるか？普通の格好だろ」

カッターシャツと黒いズボンが変な格好だったら学生諸君はどうなるのだろう？

「はい。身分が高くてそんなもの着ませんし、低くても着ませんよ」

「そうか…」

俺は歩き始めた。それをアステルが追う。

「あの街まで一緒に行きませんか？私としては（寂しくないし）戦闘に困る事がないなどのメリットがあります。」

「俺にはメリットが無えんじゃねえのか？」

「ちゃんとあります！モンスターを倒せばお金を落とします。お金については…後にします」

アステルは話をやめ、前を向いている。

えーと、何？

そいつらの身長は二メートル位ある。肌は緑色で耳は尖っており、木の棍棒を持っていた。何か獣臭い。まあ、なんていうかゲームとかによく出てくるゴブリンだった。数は三つ。

「ゴブリンです！」

「あ、やっぱり？」

俺は竹刀袋から、蓮華を取り出した。

蓮華の刃を左下後ろにして構え、真ん中のゴブリンに突進した。

そして、真ん中のゴブリンの前で急停止し、蓮華を思い切り右上に切り上げた。

その後、俺は蓮華を体ごと回転させ風を起こす。

《風波刃》

吹き飛ばされたゴブリンは、金だけ落として全員くたばった。

うまい具合に血の付いた場所と、銅貨二枚と銀貨一枚は別の場所に落ちた。

「危ねえ。血が金に付くところだった」

アステルはこちらを見て啞然としている。

そんなアステルを無視して俺は、蓮華に付いた血肉を丹念に取った。

敵を倒すと金を落とすって本当なんだね。

第四話 獣道で…（後書き）

更新完了！

はりねずみです。

えゝお金のことですが単位はN^{ニア}です。

銅貨が10N、銀貨は100N、金貨は1000Nとします。

登場人物紹介ゝ

アステル

身長155センチ位。

髪は金髪。

瞳は橙色。

おかしな子です。

戦闘をしませんでしたが、戦闘メンバーになる予定です。

でわ。

ばいにゝ

第五話 獣道から街へ

はあ。ええ、只今、質問攻めにあってる。

「何で魔術師だって事黙ってたんですか？どうやって詠唱無しで魔術が使えるんですか」

「俺は魔術師じゃねえ。大体、詠唱ってなんだ。」

などと全く会話がかみ合わない。

アステルの言葉を俺はほとんど聞いていない。たまに聞こえた質問に答えているだけだ。まあ全く答えになって無いけどな。

まあとりあえず最初、真面目に聞いていたときの事をまとめよう。

まず、金の事について。

^{ニア}Nは、銅貨10N銀貨100N金貨1000Nで構成される。
安い宿なら20Nで泊まれるという。

50Nあれば普通の宿に泊まれそうだ。しかしまあ、食べ物とかも調達しなければならぬし、日用品も買わなければならない。

『二三日なら170Nあれば十分』とアステルは言った。

しかし、お金はあるに越した事は無い。

と言うわけで、たびたび戦闘を行い、只今の所持金は、480Nだ。
これでもかなり持っているらしい。

こんな簡単に金は溜まってよいものなのか？働くより数倍も楽だ。
この世界も案外悪くはないかもな。

ちなみに、金が簡単に溜まることだけがいい事では無いよ。他にも
空気が綺麗だとかもあるんだ。

もう一つ、魔術師と言うのは詠唱をした後、魔術を出す奴の事らしい。

魔術師というのはほんの一握りの人間だけだそうさ。千人に一人くらいだそうさ。

しかしこの世界の総人口から見れば、特に珍しいものではないそうさ。

アステルは、魔術師では無いらしい。が、それなりに戦闘をこなせるのだという。

まあ、任せる訳にもいか無かった。

ソ。ジョイやカ。リーメイトをこれ以上取られてはいかんと言うわけで、俺が一人で全員倒してきた訳だ。

ちなみに、まだ力。リーメイトをあいつの前で食べていない。味を占められたらたまったものではないからな。

まあ、結局これくらいしか頭に入ってこなかった。

そんなこんなで街に着いた。

石造りの家が、かなり印象的だった。RPGでいう少し大きめの街といったところだ。

アステルって意外と体力あるようだ。二丁三時間ずっと歩きっぱなしだったが、全く疲れた様子が無い。

俺はまず宿をとっておくことにした。一人40Nのごく普通の宿だ。とりあえず、街を歩いた。行く当ても無い。ただの散歩みたいなものだ。

早速問題にぶち当たった。字が読めねえ。アステルに字を読んでもらいながら街を歩いた。

宿に泊まるので、食材は買わなかった。

とりあえず、厄除けの効果があるといわれる水色の宝石の付いた指輪を買った。当然つけないで鞆の中へ投げた。かなり安かった(20N)ので多分効果はあまり無いだろう。

武器屋を見つけた。

内装は、かなり頻繁に掃除をしているのか、武器屋と言うより宿屋だった。絵も立てかけてある。

武器も綺麗に並べてある。

そこで、ナイフや短刀を見た。剣もあるが、アステルは剣を使わず、ナイフと短刀を使うそうだ。俗に言う二刀流という奴だ。

アステルは、短刀とナイフを買っている。

40Nのナイフと60Nの短刀だ。

こいつ、金もって無いとか言っていたが、結構持っている。200
Nくらいは持っていた。

自分で宿代払えよ！と言いたかったが、言っても嫌な予感しかしな
かったためやめた。

俺達は、宿に帰っていった。

その後も何も起きなかった。

厄除け守り、買って良かったかも。

第五話 獣道から街へ（後書き）

更新完了！

今回は特に面白く無いです。

作者的にもね。何も起きなかったし。

でわ。

ばいに！

第六話 早速事件に巻き込まれた

宿屋の借りた部屋で、アステルに聞かれた。

「スイカさんおかしいですね。普通あれくらいの文字なら誰でも読めますよ。何で読めないんですか？」

「それには事情が…」

俺はもう隠す事も無いと思い、全てを話した。

全てと言っても、自分が異世界から来た事くらいしか話すことが無かった。

「異世界ですか…」

「なんだ？信じるのか？普通は信じないぞ」

「信じますよ。元々この世界には異世界があると言う仮説もありますし、一般常識にもなってます。異世界人には会った事がありませんでしたか」

へえ。異世界には、俺達のいた世界があると分かってたみたいだな。びっくりすると思ったのにな。

「スイカさんは多分、穴^{ホール}に入ってしまったのだと思います。穴は、不規則に現れるそうで、そこが学者を悩ませている点だそうです」

穴ねえ…不規則に現れるんじゃないやあいつ帰れるか分からねえじゃねえ

か。まあどうせ事件に巻き込まれるだけだし、帰れなくてもいいけど。

「スイカさん。それともう一つ。あの風を起こす攻撃は本当に魔術じゃないんですか？私には魔術にしか見えませんでした」

「いや。あれは魔術なんかじゃない。元々俺にあった能力だ。大体、普通の人間と魔術師ってのはそんなに変わらないんだろ？」

「はい。確かに魔術師と普通の人間と運動能力というのはあまり変わりません」

「だろう？普通の人間があんな速さで全員が走ってみろ。とんでもないぞ」

「確かにそう考えると納得できますね。あなたの世界では、そんな能力を持った人はたくさんいるのですか？」

「さあ？ただ知っているのは、特定の家系の人間だけがそんな能力を持っている。ってところだな」

そんな話をしていると

「「「うわああああああああああああ」」」
という大勢の人間の悲鳴が聞こえた。

「なんだ。また事件か」

もう俺は驚かないぜ。こんな目には何回も遭ってきた事だし。街を歩けばヤーサンに絡まれ、銀行に行けば銀行強盗に遭う。などなど常人じゃあ体験出来ない事を体験してきたからな。

「行く？」

「行くんですか？まあいいですけど」

俺の部屋に俺は学生鞆を置き、アステルは自分の部屋に戻って荷物を置いた。

「じゃ、行くか」

俺達は走って現場に向かった。

街のはずれにかなりデカイ狼を発見した。数は二体。体長は約三メートルはあるだろう。黒い狼だ。

「片方は任せる」

片方をアステルに任せた。あんなデカイのは少しキツイだろう。

俺は、右側にいた狼に突っ込んだ。

狼は鋭い爪で俺を引き裂いた。しかし、切り裂いたのは残像。俺はすでに斬りかかっている。しかし狼は生意気にも体を回転させることで、俺に斬らせる事を許さなかった。

俺は舌打ちし、バックステップをした。面倒な相手だな。頭もいいようだし。

俺はもう一度普通に切りかかった。蓮華を横に薙ぐ。

《風旋刃》

一塊となった風が狼を襲う。

狼は横に飛んでかわし、俺に爪を立ててきた。

俺は後ろに飛んで、周囲に風を起こす。

狼は近づけないと悟ったのか、バックステップで離れていった。

一筋縄ではいかないようだ。

仕方ないな。俺は蓮華の刃を鞘に戻し、抜刀術の形をとった。

《疾風閃》

俺は狼に向かって走り、抜刀切りする。しかし、狼は後ろに飛ぶことで、抜刀切りを回避するが、顔に掠り狼の右目を抉った。

まだ俺の攻撃は終わらない。右上に持っていった蓮華で、踏み込んで切り下ろす。

《疾風重ね》

風を纏った蓮華の切り下ろしは、狼の体を真つ二つにした。

俺は、蓮華を鞘に戻し、アステルの方を見た。

第六話 早速事件に巻き込まれた（後書き）

更新完了！

今回は、戦闘に少しだけ力を入れました。
どうだったでしょうか？

やっぱり上手では無かったですよね（涙）
もっとうまく書けるよう頑張ります！

次回は狼戦アステル目線です。

でわ。

ばい！

第七話 事件に巻き込まれて（前書き）

今回はアステル目線です。
では本編へどうぞ…

第七話 事件に巻き込まれて

「片方は任せる」

スイカさんは言った。

デカイ狼。

もうすでにスイカさんは戦い始めている。

やっぱあの人おかしいって！魔物もあっさり倒しちゃうし。

でも、任されちゃったし頑張ろっかな。

私は刃長30センチの短刀を右手を持ち、左手にはナイフを持つ。

狼が正面から突進してきた。それを右の跳んで回避する。しかし狼は、ターンしこちらに襲ってきた。

私はナイフを投げて迎撃した。ナイフは狼の左目に刺さった。左目は潰れ、狼の左の視界はもう無い筈だ。

私は右に飛んで狼の視界から消えてやった。そして、右から短刀で襲う。

右半身を切りつけ、バックステップで距離をとると同時にナイフを懐から取り出した。

まだまだピンピンしている。時間が掛かっても仕留められればよい。

狼はかなり怒っているらしい。まあ当たり前だよ。目を潰されて怒らない奴なんていないでしょ。

さつきよりも速い。右からの攻撃。私はやむ終えず左に跳ぶ。

左背後から短刀で襲う。しかし、狼は前に走りターンした。

爪を立てられる。バックステップをしてギリギリで回避する。

今のは危なかった。

もういいや。あまり本気出たく無いけど出しちゃおっかな。故郷から出てまだ1度も使っていない力。

小さな頃、忌み嫌われた原因。

『魔術師モドキ』と言われた。

スイカさんのように生まれつき持っている力。

冷気を操る能力。

私は距離を開け、狼が襲い掛かってくるのを待った。怒っているの
で襲い掛かってくるまでそう時間は掛からなかった。

右に跳び視界から消える。冷気を纏ったナイフを投げる。

ナイフは刺さった。狼の動きが止まる。

もう勝ったも同然。

私は狼にトドメをさした。

気付けば、スイカさんがこちらを見ている。

こちらを奇異の目で見てはいない。むしろ安堵に満ちていた。

力を使ったところを見られたのに奇異の目で見られなかった。それは初めてのことだった。

私は、スイカさんの所に駆け寄った。

「変ですか？」

「別に。そんな力持つてる奴見たことあるしな」

「そうですか」

同じような人間はまだいる。異世界だけど。

私は安心した。この人の近くなら、いくらでも力を使える。それに独りになることも無い。

「なあ。宿に戻らねえか？」

「どうしてですか？」

「お礼とかされるのって嫌なんだよな」

「同感ですね」

私たちはそそくさとその場を去った。

第七話 事件に巻き込まれて（後書き）

更新完了！

いや、女性視点ってのは難しいですね。

もう二度とやってたまるか！

→フラグですね

*恋愛に繋がるなんて事は（おそらく）ありません。おそらく……

ね？*

でわ。

はいに〜

第八話 街を出よう

俺達は、宿に帰った。

街ではまだ騒ぎが治まっていない。

宿の部屋では、まだアステルがナイフの血肉を拭き取っている。かれこれ結構たっている。

「まだ拭いてんのか？」

「はい」

「何でそんなに頑張るんだよ」

「^{ニテ}Nが勿体無いからです」

はつきり言おう。

俺はこいつの考えが結構素晴らしいと思う。今の時代、勿体無いという言葉が聞かなくなっただけだから。

皆も勿体無い事すんなよ。人の事言えた義理じゃねーけど。

「ナイフも結構高いんですよ」

「そうか」

そんな適当な会話は終わり、二人は別々の部屋に戻り、寝た。

チュンチュンなんて音は聞こえなかったが朝だ。

俺は朝に大抵決まった時間に起きる。

「ふあゝあ」

俺は欠伸をして、伸びをする。

俺は寝起きは頭が動かない。簡単に言えば朝に弱い。

俺はとりあえず朝には頭を起こすために外へ出て運動をする。

街を走ることにした。もちろん蓮華も持っている。

頭を起こすだけだ。そんなに時間がかかるわけではない。三十分くらいの運動で済んだ。

俺は宿に戻り、アステルを呼ぼうとした。

ドアの前に立ち、ノックをしようとする……

「何ですか？」

アステルが出てきた。

もう出発の準備は出来ているようだ。

「ノックして起こしてやろうと思ったんだが」

「人がドアの前に立てば分かりますよ」

何処の暗殺者だよ？お前は。

まあ出発の準備が出来ているならいいか。

「出発するぞ」

「何処へですか？」

「知らねえよ」

「じゃあ出発のしょうが無いじゃないですか」

「とりあえず入ってきた所と逆から行こうと思う」

「南へですね…確か南には、アディオンという街がありますよ」

「じゃあ目的地はそこで。どれくらい行った先にある？」

「そうですね…多分五日くらいかかるでしょうね」

「そうか…じゃあ食材の調達に行かなきゃな…」

「食材ならありますよ。ここに」

アステルが腰のポーチを指しながら言った。

とても食材が入っているようには見えないぞ。

「どこに？」

俺はもう一度聞いた。

「そうか…スイカさんは知らないのか…」

え？何を知らないって？

「仕方ありませんね…説明します。」

このポーチの中には箱ボックスというものがあります」

「箱？」

何それ？美味しいの？

「箱は……」

あゝ良く分からねえや。

まあ簡単に言えば、ドラ。もの。次元ポケットみたいなもんだ。

説明乙。

「まあ大体分かった。一つも問題ないか？」

「問題ですか？」

「テントはどうする？」

「ああ…テントは二つありますよ」

コイツ保険かけとかなきゃ気がすまないタイプなんだな。

新たな発見。

俺達は街の南に向けて出発した。

あ…そうだ！

まだ朝飯食ってねえしカ。リーメイト食べよ。

俺は鞆からカ。リーメイトを取り出した。それを口に運ぶ。

じーーーーーーー

あれ？デジャヴ？

仕方なくアステルにカ。リーメイトをあげた。

アステルはカ。リーメイトよりソ。ジョイの方が好みらしい。

その後、カ。リーメイトとソ。ジョイについての口論が始まった。

それは街を出ても続いた。

第八話 街を出よう(後書き)

更新完了！

いやー作者も。次元ポケットほしいなあ。

特に書くこともないので、

でわ。

ばいに〜

第九話 事件に巻き込まれる寸前

カ。リーメイトとソ。ジョイについての口論も終わり、俺とアステルは山道を歩いていた。

緩やかな傾斜が続く。

「はあ…はあ…」

アステルは肩で息している。

「疲れたか？」

「当たり前じゃないですか！あれだけの口論をして肩で息をしないほうがおかしいです！！」

そう。俺達はかなり長い時間口論を続けていた。ああ言えばこう言い、こう言えばああ言うを繰り返していたのだ。

議題が納得いかないけどね。

「別に。俺は疲れて無いぞ？」

「やっぱりおかしいですよスイカさんは」

「お前もな」

「さっきの口論のせいで否定できません」

結構かわいそうな子だな。

「まあ。多分もう少しで休憩所があると思う」

「多分ありますよ。もう大分進みましたしその証拠に前を見てください」

いや前を見てるよ？でもこれって証拠になるのか？

目の前には…スライムとしか言いよつた無形状の中に丸い物体のある奴がいる。

「スライムです」

「え？意味分かんないんだけど」

「モンスターが出てくるようになったって事です。基本的にこの大陸の山ほとんども標高が高くなるほどモンスターが出やすくなります。モンスターが出ると言う事は山を登った事になり休憩所も近くにあるという事にもなります」

「ああ…そういうことなのか…まあ…それはそれでいいや。で、問題だ。こいつを倒すと金が出てくるのか？」

無益な闘争なんてごめんだしな。

「スライムの中にある核を売ればお金になりますよ」

「核ってあの丸いやつか？」

「はい。そうです」

「売値は？」

「銅貨一〇二枚です」

「よし」

俺は蓮華を鞘から抜いた。ちなみに竹刀袋と鞆は、箱ボックスの中だ。

しかしなあ。核を売るにはどうすればいいのだろうか？

俺は攻撃できなかった。

しかし、アステルは突っ込んでいった。

まずスライムの動きを封じるためにナイフを投げた。

ナイフが刺さり、動きが止まった。元々動いてなかったけどな。

アステルは近づき、短刀でズタズタにした。

血のような液体は出なかった。

そして丸いやつを刺した。

「ちょっと待てええええええ！！」

しかし時すでに遅し。

「なんですか？」

「核刺したら売れねーだろ」

「別に構いませんよ？スライムの核というのは元々研磨剤くらいの材料にしかありません」

「そうか」

なら仕方ないね。

結局スライムが出現したのは一回だけだった。

休憩所に到着した。

俺達はレストランと言っかなんと言っかな店に入って昼食を摂っている。

内装は、レストランと酒場が混じった感じだ。

丸い机に椅子は四つずつ。

壁には絵が立てかけられている。

俺達が入ってすぐの席に座った。

俺は、懐かしのパスタを食べている。
アステルもパスタだ。

二人とも理由は明快だった。安いから。

ちなみにこの店は先払いで食い逃げなどが全く無いそうだと。素晴らしいことだと思う。

パスタを頬張っているとなにやら奥が騒がしくなってきた。

こんな騒ぎは街に出れば日常茶飯事だったから驚かないぜ。すごいだろ。あんま嬉しくねーけどな。

「またですね」

「まただな」

二人の声はハモった。

「スイカさん何か憑いてるんじゃないですか？私一人の時はこんなに巻き込まれませんでしたよ」

「ああ…俺も何か憑いてると思う。昔からな」

俺達は席を立つと騒ぎの元へ足を向けた。

第九話 事件に巻き込まれる寸前（後書き）

更新完了！

設定があまりにも適当だったので詳しく載せます。

名前 銀星彗駆

誕生日 7月9日

血液型 A型

身長 175センチ位

好きなもの カ。リ。メ。イ。ト

嫌いなもの 厄介事

特技・能力 巻き込まれる事・風の力

備考 髪は銀髪（白髪）

髪の長さは少し長め

瞳は水色

名前 アステル

誕生日 ？

血液型 O型かな？

身長 155センチ

好きなもの ソ。ジ。ヨ。イ

嫌いなもの 一人

特技・能力 冷気を操る

備考 髪は金髪

長さは肩にかかるくらい

瞳は橙色

こんなトコですね。

登場人物の設定はこれから後書きで書きます。
でわ。
ばいに〜

第十話 巻き込まれたら

さて。騒ぎの元へ行っただが、いつもとは少し違った。

一人の男が演説と言うかなんと言うかをしているのだ。

その演説の内容を聞くと、

昨日街を襲った巨大な狼の話だった。

演説をしている奴を見ると、ただのおっさんだった。

その演説をしている奴はこう言い放っていた。

「その狼を一人で倒した」と。

いや何を言っているんだ。あいつは。狼は俺とアステルが結構頑張っ
て倒したじゃないか。

アステルの表情を見た。

なんともいえない表情だった。

笑っていたが、目が笑っていない。

それもそうだろう。アステルは能力を使うことに抵抗を持っている。
その能力を使って勝ったのだ。

ヤバイって。今まさに喧嘩を売ろうとしている。

俺は腕をつかんで止めた。

「止めろって！」

「嫌です！」

もうダメだ。あきらめよう。

仕方なくアステルを放し傍観者に徹底することにした。

アステルがおっさんの前に行くと、ドスの効いた声でこう言い放った。

「じゃあよう。その實力見せてみるよ」

ヤバイな。口調も変わってる。アステルを今後怒らせないようにしよう。

周りもザワザワしてきた。

「お嬢ちゃん正氣かい？俺は巨大な狼を倒したんだぞ？」

「あつそ。おめえが倒した狼ってのはただ少し大きかっただけじゃねえのか？」

「じゃあいいぜ。そんなに俺と勝負したいなら受けてやってもいいぜ？ただし、俺は手加減しねえからな」

そう言っ大剣を取り出した。

アステルもナイフと短刀を取る。いつもよりおかしく短刀を逆手に持っている。

徹底的に掻き切るつもりだろう。おっさん死ぬかもな。

最初に動いたのはおっさんだった。

おっさんは大剣を地面に叩きつけた。

それをヒョイとかわす。

次におっさんは大剣を横に薙いだ。

それを跳んでかわし、着地した瞬間にアステルは足払いをかけた。

大剣を振って体重が横に掛かっている時に足払いをかけられて立てるやつはいない。

おっさんは見事にすっ転んだ。

こけているおっさんにアステルは逆手から持ち直した短刀を突きつけている。

「弱いなお前」

アステルは言い放った。

狼を倒したと言っているおっさんがあっさり倒されたことで周りが

更にザワザワしてきた。

ヤバイぞこれ。俺の長年の勘がそう言っている。

俺はアステルの手を取りさっさとそこから立ち去った。

俺達は休憩所を後にし、山道を歩き始めた。

「何であそこで喧嘩を売った？」

俺は聞いた。

「だって」

「だってじゃない。あそこで聞いて無視すればよかっただろう」

言い放ってやった。ときには心を鬼に…

「スイカさんは悔しく無いんですか？」

「別に」

そこで話を止めてやる。もうこの話題には触れないようにしよう。

その後も黙々と歩き続け山を越すことが出来た。

俺達は、商人達が休憩している休憩所に来ていた。

「この先は森です。今日はここで野宿をするのが良いと思います」

「そうだな。明日は夜明けには出発するか」

「じゃあテントを張るので離れてください」

そしてアステルは腰のポーチから手の平大の箱を取り出した。

その箱の側部のボタンを押した。すると…

何かモコモコと膨らんで黄色いテントが張られた。

その張られているときの様子を一言で言うと…

不気味だ…

そして俺の手にも箱が渡された。

箱を渡すとアステルはテントへ戻っていった。

迷わずボタンを押した。

張られたテントは黄色いテントだ。形も同じだった。

なんで同じやつなんだ。

色くらい違うテントにしるよな。と言いつつテントに入った。

そして食べ物を食べた後、即刻寝た。

明日も何もありませんように。

第十話 巻き込まれたら（後書き）

更新完了！

にしても今回は何もなかったですね。

最初はこれで誰かを仲間にしようと思ったのですが、アステルの黒い部分を書きたかったのでこうしました。
どうでしたか？

まあたまに出そうと思います。
でわ。

ばい！

第十一話 朝には気をつける

俺は気が付くと森を歩いていた。と言いか起きたときの記憶が無い。

俺はどうやって起きたのだろう。

俺は迷わず聞いた。

「なあ。俺起きて来た時どうだった？」

「半分意識が無かったようです。全く喋りませんでしたし、必要最低限しか動いてませんでした。テントをしまうときボタンが目の前にあるのに必死にボタンを探してました」

アステルは思い出したのか笑いを堪えている。本人の目の前でだ。なんて失礼なんだ。あいつ絶対朝、俺を見て笑ってたね。

なんて考えつつ、森を歩いていると目の前に…青い四角い体の中に、丸い核のある生物が現れた。

「スライム？」

「はい。キューブスライムです」

「まんまだな」

半ば呆然と返した。

「ちなみに普通のスライムより硬いです」

「そんな豆知識は要らんぞ。どうせ斬るんだ」

俺は鞘から蓮華を抜いた。

そして構えようと姿勢を落としたそのとき…ボキイと鳴った。勿論俺の骨。

腰がっ！俺の腰があっ！！

もうダメだ。とアステルに合図した。

アステルの目が少し細まった後、ニヤリと笑った。

ヤバイ…これは弱みを握られてしまったようだ。これをネタにして、絶対パシリとかさせられる。

俺にはもう余裕が無い。一刻も早く腰を直すために目を瞑って腰の治療に専念する。

腰に手をやり擦る。擦りながら、氣というものを腰に送る。

氣というのはまあ簡単に言えば、能力を使い風に変える前のエネルギーのようなものだ。

氣は全ての人間が持っているものだ。ただ、無限にあるという訳ではない。

氣を風に変えたりするのは、俺のような能力者で無いと駄目だ。

集中すれば治療はものの二十秒くらいで済む。

俺の腰の治療が終わり目を開けると、既にスライムは倒されていた。ダメだったか…貸し一つかぁ…絶対何か最低一つはさせられるな。

腰の治療も終わった後、立ち上がって蓮華を鞘に戻した。

「大丈夫ですか？」

「ああ…大丈夫だ」

多分だがアステルは内心かなり悔しがっているだろう。

（チッ！もう少しで完全に弱みを握れるトコだったのに…）

みたいな感じで。そう思うと軽く身震いがしてきた。

俺は朝には気をつけよう真剣に思った。

森の中では、汚名返上といわんばかりに戦闘を頑張った。森の中はかなりエン力率が高いらしい。戦闘数がハンパじゃなかった。

戦闘中アステルの顔をチラッと見たとき笑っていたのは多分気のせいだろう。そう信じたい。

そうして無事森を抜けた。もう夕方だ。

「ここらでやめ……」

「まだですよ。あと少しで街に入ります。頑張りましょう」

と笑顔で言ってきた。弱みを握られてしまっている今、俺に反論は許されなかった…

そして街に着いた。ちなみにすぐ着くとは言ったものの、あの後二時間は歩かされ、おまけに全ての戦闘を俺がさせられ、さらには手に入れたNも三分の一は取られた。

そして真っ先に宿に向かい、部屋を取って、俺は休んだ。

明日の朝は寝ぼけたりしないようにしないな。

意識が途切れる前、最後にそう思った。

第十一話 朝には気をつける（後書き）

更新完了！

今回から更新のペースが遅くなります。

6月の下旬までは、1週間に一〜二話くらいになると思っています。
でわ。

Good Bye!!

第十二話 巻き込まれて…

俺は朝早く起きた。

おそらく、本能によるものだろう。意識もすぐに覚醒した。

しかし、目的地に着いてまだ半日もたっていない。どうしたものかと考えた結果、とりあえず外に出た。

まだ店も開店していない。まあ当たり前だ。さっき夜が明けたばかりだぜ？

店で暇つぶしをする事もできず、ただ街を見て回った。

外観は、この前の町とあまり変わらない。ただ、この前の町に比べると建物が多い。この街の総人口は結構な数になるだろう。

宿を出て、四十分くらいたっただろうか。

まあお分かりだろう。

迷っちゃった……

今何処にいるのだろう。看板に街の案内とかあったらいいんだけどな。ただそんなに現実には甘くないことを俺は知っている。知りたくも無かったけど。

仕方なく適当に進んでいるとたまたま宿を見つけた。

よっしゃああああああああああ！！！！

俺は心の中で叫んだね。

奇跡だ…奇跡が起きた…

生涯無かったくらいの幸運かもしれない。

そして俺は宿の中に入った。昨日はあまり見ていなかったが、食堂というものを発見。

中を見てみると、既にアステルが食事をとっていた。

俺はアステルのところに行って、注文をとる。

今日はオムレツ的なものを頼んだ。第一に安かったからな。

頼んだ品を待っている間、俺はアステルと喋っていた。

「何処行つてたんですか？」

「外に…な」

ちよつと冷や汗が出てきた。

「結構心配したんですよ？」

「それについては謝る」

「まあ…いいですよ。ただし、今日は街を案内してもらいます。私もこの街初めてですし」

「待ってくれよ。俺もこの街はよく分からね」

「そうですか…」

アステルはちよつと残念そうな顔をした。

なんだよその残念そうな顔は…そんな顔をされたらな…断れ無いじゃないか。

「分かったよ…案内にならないかもしれないが案内してやるよ」

「本当ですか!？」

なんか嬉しそうにしている。

何故そんなに嬉しそうなのだろう?正直、迷うのがオチだろうと俺は思う。

まあそんなこんなで街を案内することになった。

食事を終え、街へ出る。

街には人がちよこちよこと出てきていた。いつから人が出てきているのだろうか。俺が外に出てきた頃は人っ子一人いなかったような気が…

俺が街を彷徨い歩いているときに出て来たのか?それだったら相当長いこと迷っていたことになる。

しかし、これでわかった。

俺はとんでもなく長く外にいたために、アステルは街をほとんど見回ったと思っているのだ！

どうしような…俺は「迷ってました」なんて言える訳が無い。言ったらどうなるだろう？

少し想像…

「じゃあ迷子になってたんですか！？」「と言って笑う姿が目に見える。

ちょっとそれはマズいな…

ではどうしろと？

仕方なく、街をふらふら歩くと言う選択肢が出現した。

迷わず選ぶ。

ええい！もうどうにでもなれ！！

適当に進んでいると、市場に来た。

「ここが市場だ」

と、知っていたような口を利いた。

「へえ、そうなんですか」

とだけ言っている。

よし！作戦（？）成功だ！

俺達は市場に入った。

市場には食べ物だけでなく、雑貨屋などもあった。

市場と言つより商店街だな…

とりあえず、そこらにあった装飾品を売っている店に入る。

内装はとても綺麗だった。装飾品を見て回っていると…

「泥棒よー！」

と言つ店員の叫び声。

その叫び声に反応し、俺の体が勝手に動いた。悲しき俺の性…

「ちょっと！ま、待ってください！」

アステルは俺を追ってきた。アステルの手には…髪飾りがあった。

「お前が待て！その髪飾り返して来い！！」

「後で盗人と一緒に返します！！」

その後ボディーガード的な人も追って来た。

ボディーガード的な人は十六、七歳だ。身長は165くらいに見える。髪は短めで茶髪で黒目だ。

とうとう髪飾りを持っているアステルを見て追ってきた。

泥棒↑俺↑アステル↑ボディーガード的な人

というへんな追いかけっこが始まった…

第十二話 巻き込まれて…（後書き）

更新完了！

今回も書くこと無い（泣）
でわ。

Good
bye！

第十三話 追いかけて

俺は追っているのに追われているという悲しい状況にいる。

「待つて下さい！」

アステルが俺に向かって叫ぶ。

「嫌だね！大体、アステルが髪飾りを渡して状況の説明すればいいだろ！！」

俺は振り向かずに返答した。

「私一人に罪を着せるつもりですか！？」

「アステルが盗みをするからだろ！」

「盗んでないです！！失礼な事この上ないですね！！」

「ああ！もう埒があかねえ！後で説明してやるからおとなしく捕まって待つてろ！」

「今、何気に酷いこと言いましたね！！」

とガミガミと言い合いながら追っている。あ、ついでに追われている。

「待てええええええええ！！」

少年も叫ぶ。

しかし盗人速いな…

俺と盗人の距離が縮まらない。

力を使うのは却下。後々面倒だしな。

というわけで力も使えない。どうする？

「待ってください!」

アステルの叫び声。

無視!!!

「待てえええええ!!」

少年の叫び声。

無視!!!!

市場というか商店街を抜ける前、盗人が突然ルートを変更した。
盗人は路地裏に逃げていった。

チャンス!俺は心の中でガッツポーズを取った。

俺が路地裏に完全に入った後、俺は力を使って急加速した。

俺は盗人に追いつき、手刀を入れて、気絶させた。

ふう…一件落着

……………してねえよ!!

アステルはこちらに走ってきた。

走ってきたアステルの足を引っ掛けてこけさせ、さらに少年の足も引っ掛けた。

アステルもこけている。その上に覆いかぶさるように少年がこけている。

周りから見たらやばいぞこれ。原因作つたの俺だけど。

少年はすぐに立ち上がった。

その後、アステルも立ち上がった。

「酷いです！！無視した拳句こけさせるなんて！！」

アステルは、少年には気付いていないようだ。

ちよつとだけ安心した。

「盗んだ髪飾りを返してください！！」

少年が突然言った。

「分かった。その髪飾りって何 N^ニ？」

「えつと…20Nです。って何言わせるんですか！」

「いや元々は買おうと思っていたんでな…」

その後あつたことを話した後、20N払った。

「そついうことだったんですか…早とちりしてすいません…」

「いや別に…じゃ本物の盗人を連れて行こうか」

盗人の方を見ると、アステルが盗人の頬を叩いて起こそうとしていた。

「おい！」

突っ込むしかなかった。

アステルが頬を叩いていたせいだろうが、うう…と盗人は呻いた。

「起きました！」

ん？声が何か女っぽいと疑問に思い、よく見れば盗人は女だった。

身長は百七十くらい。長い紅い髪あかの毛に、黄色の瞳。

その後、暫く経つと盗人は立ち上がった。

「なんですかこれ？」

「惚けないで下さい！貴方が盗みをはたらいたという事はお見通しなんですよー！」

「だから何？私はちゃんとお金を払ったわ」

「『ええっ！！！！』」

3人の声が重なった。

「俺が追っているとき走って逃げてたじゃないか」

「そりゃあ追われてたら逃げるしかないじゃない」

「じゃあ…俺達の勘違いだったって事が…」

はあ…俺は溜息をついた。こんなケースは初めてだ。

「仕方ないですね…一旦戻りましょう…」

アステルがそういった後「ああ…」と返事をして俺達は装飾品屋に戻っていった…

第十四話 追いかけてこの後

追いかけても終わり、俺達は例の装飾品屋に向けて歩いていった。

ちなみに少年の名前はシークで女性の名はアディだ。

「はぁ……」

溜息をついた。

こんなケースは初めてだ。ついでに言うと失敗したのも初めてだった。

簡単な仕事だったはずなのに……

もう何度目の溜息だろう。

後ろではシークとアディとアステルが話している。

そして装飾品屋に着いた。

「俺はこの店長と話してくる」

とそれだけ伝えて一人中に入ってしまった。

その後店長らしき人に事情を説明した。

「……そう。まあ髪飾りはちゃんと買い取ってもらっけど」

「シークに金は渡してある後でもらっておいてくれ。もう二つ聞いていいか？」

「何？」

「盗まれた物の値段は？もう一つ盗んだ奴の身なりは？」

「そうねえ…多分2000Nくらい。身なりは…全身砂色だったわ」

「全身？」

「ええ。服も外套もあろうことか髪も砂色だったわ」

そりやある意味スゲエな。

「そつだ…ほらよ2000N」

「いいの？」

「いいんだよ。別に」

「そつ」

2000Nを渡して俺は装飾品屋を出る。

店を出ると三人とも待っていた。

「どうだった？」

「どうもしない。事情はちゃんと説明した」

「そうか」

シークとの会話は終わった。さあ盗人探しにいくか。

「俺は盗人を探してくる。昼飯は…自分達で食べる。夜には宿に戻る」

「私も行きます」

「私も行くわ。何もして無い筈の私が代わりに追われちゃったわけだし」

アステルはともかくアディはかなり怒っているようだ。

「僕は仕事を続けるよ。多分もう皆とは会わないだろうけど元気で」

シークはそれだけ言うと店に入ってしまった。

「じゃ行くか」

なんだかんだで一番怒っている俺。

この屈辱は絶対に盗人をボコボコにする事で晴らしてやる…！

昼になったので飲食店へ訪れていた。

「…いませんね…全身砂色の人なんて」

「全身砂色でしょ…やっぱり砂漠の民じゃない？」

「「砂漠の民？」」

アステルと俺が同時に聞いた。

「あれ？アステル知らないの？砂漠の民。かなり有名なのに」

「私…ミルディア出身なので」

「ミルディア！？あの！？」

アディは目を剥いている。

ミルディアって何処なんだろう？

大体ミルディア出身ってそんなに驚く事なのか？

「はい。本当です…」

「確かに…他の国と一切干渉しないあの国なら知らないのは無理ないわね」

「ミルディアって何処？」

俺は普通に聞いた。

「知らないの!？」

「ああ。知らない」

「あなた達やっぱり変」

やっぱりって言うなよ。かなり落ち込むぞ？

「まあいいわ。先にスイカの質問から答えるわ。ミルディアっていうのは…」

長いので少しまとめよう。

1：ミルディアは別名魔術大国。魔術の発祥の地で、ミルディアの民は例外なく魔術師。

2：ミルディアは他の国と一切干渉しない。ミルディアを出たら絶対に帰っては来てはならないっていう掟まである。

3：ミルディアの位置は、この世界にある三つの大陸の中でも一番大きな大陸…俺達のいるエルト大陸の真東にある。

こんなところだろう。

「次にアステルの質問に答えるわ。砂漠の民って言うのは…」

こちらも長い。

1：砂漠の民は国で生きていけなくなった魔術師の集まりである。

2：砂漠の民は全員が髪を砂色に染めている。服装も全員が同じ。

こんなところだろう。

「でも砂漠の民って世界のあちこちにいるんじゃないのか？」

「ここは砂漠から遠いわ。砂漠の民はいたとしても多分、数人よ」

「そうか」

そうして飲食店を出てまた探し始めた。

第十四話 追いかけてこの後（後書き）

更新完了！

六月までは1〜3日に1話は更新できそうです。

六月からはとある事情により1週間に1回程度になると思います。
お知らせ終わり。

でわ。

Good bye！

第十五話 盗人発見

飲食店を出て小1時間…

俺達は広場にある噴水のところに腰掛けていた。人はいない。

「いたか…？」

「ダメです…」

「ダメだ…」

昼からは分担して探すと言う作戦だったのだが…

見事に失敗。どうしたものかと考えていると…広場に入って来る砂色の人間を発見した。

「案外簡単に見つかったな…」

「そうですね…」

さっきの頑張りは一切何だったんだ？

「行きます？」

「ああ。俺一人だな」

「いいの？一人で」

アディは心配をしてくれるようだ。心配されるとは人生の中でも殆どなかった。

「心配は要りませんよ。この人の強さは異常ですから」

「そう。なら心配いらないわね」

アステルが見事に俺の貴重な心配されるという経験を叩き潰してくれた。

「じゃ行ってくる」

そして俺は能力を使う。

身体能力の強化。

俺はその場から消え、一瞬で砂色の盗人にたどり着き、手刀を入れた。

盗人はうつゝと呻きその場に崩れた。

その後、起きない程度に数回足蹴りをする。

そして、盗人を担いでアステル達がいるところに行った。

アディは啞然としている。

「何をしたの？」

「ちょっと本気を出した」

（苛苛してたからな）と内心で付け加えた。

「本気を出したら、人って消えるの？」

「ああ。消える」

適当に答えた。だって面倒だし。

「嘘はいいわ。本当のことを言って」

「だから本気を出したただけだ」

嘘は言っていないぞ。嘘は。

「本当に？」

「ああ。それよりそろそろ行かないか」

「そ、そう」

アディはまだ悶々としているようだ。

装飾品屋に着き、中に入り、店長に話し掛けた。

「時間掛かったね」

「そうだな」

そういつて盗人を差し出した。

「煮るなり焼くなり好きにやってくれ。俺はそいつがどうなっても構わん」

俺に任務失敗の文字を与えたそいつを許す訳が無い。

「ふゝん。意外と酷い人なのね」

「別に酷く無いぞ」

そいつが許せないだけだ。

「じゃあ、はい。200N」

「いいのか？」

「いいわ。盗まれた物が返って来たんだし」

「そうか」

素直に受け取った。

「じゃあな」

挨拶をして、装飾品屋を出た。

外に出ると、アステル達はシークと喋っていた。

シークは何故か涙声だった。

「あ、スイカあ」

「どうしたんだよ？」

「仕事…クビになったあ」

「はあ!？」

シークって真面目っぽいよな…

「それが…仕事してるとききよるきよる周りを見回す変な奴がいたんだ。グスツ。それで…宝石を持って出口の方へ行こうとしてたから取り押さえたら変な奴が暴れだして、店内がグチャグチャになったんだ。そのとき大事なものが壊れちゃって…」

「クビになったと」

「そうなんだよあ」

「分かったから涙を拭け」

「どうします?」

「別にこいつを旅に連れてってもかまわないがアディは?」

「私も別に構わないわ」

「本人の意思は?」

「行こうかな」

「お前戦える?」

「一応僕、スキルマスター能力者だよ」

「能力者?」

「うん。200〜300年くらい前から魔術師の子供に能力者が生まれるらしいよ。能力者は魔術が使えないけど、魔術に似たようなこと詠唱無しができるんだ。最近増えて世界単位で1000人くらいになってるんだって」

「そうか…」

（じゃあ俺はこの世界では能力者と名乗ればいいんだな）

「そういえばアステルとスイカは何で知らなかったの?もう常識のレベルだよ」

「私はミルディア出身だからです」

ちなみに…まだ昼間だ。宿に行くの早くないか？

第十六話 次の目的地の決定

「やっぱり早くないか？」

全員に向けて俺は言い放った。

「少し早かったですね」

「少しどころじゃねーよ」

そうだ。何を隠そう本当に宿に来てしまった。ちなみにまだ夕方にもなっていない。

さて何をしようか…と考えていると、「旅の支度は？」とシークの意見があつた。のだが、「必要ないです」というアステルの発言により玉砕。

う~~~~~~~~んと唸っていると…ある考えが浮かんだ。

「俺に字を教えてくれないか？やっぱり読み書きできる方がいいと思う」

「そうしましょうか」

という感じで、字の勉強が始まった。

文字は英語みたいな感じだった。割と簡単だというのが素直な感想だ。

そうしていると…夕方にはなった。が、日は沈んでいない。

結局何をしようかと、考えていたのだが…

腹減ったな…

学生鞆を探っていると、トランプが出てきた。

何故出てきたのか良く分らないが、まあいい。

「これで遊ばないか？」

「このカードはなんですか？」

「トランプだ」

「とらんぷ？」

「ああ……………」

以下省略。

というわけで俺達はトランプをしていた。

ちなみにババ抜きだ。

順番は

俺↑アディ↑シーク↑アステル↑俺

「これにします」

アステルがシークのカードを取ったとき、顔をしかめた。

ババを引いたな。

思いのほか全員はまっており、ずっとこうしている。

シークはポーカーフェイスで、負け無し。

俺も負け無し。

アディはたびたび負けている。

アステルは絶望的。

とても顔に出ている。

意外とポーカーフェイスじゃないんだ。

そう思った。

ババ抜きのほかにも、大富豪やら7並べやらをして過ごした。

夜になり、部屋に向かう。

ちなみに金が勿体無いので、二人で一部屋。

俺は即刻意識を手放そうとしたのだが…寝れない。

理由は…シークが枕を投げってくるからだ。

しかも寝たまま。枕を投げても投げても返って来る。

起きてるんじゃないかと思っただくらいだ。

いい加減うざくなり、思い切り蹴ってベットから落とした。

そして意識を沈めた。

翌日…

「俺、新しいテント買ったほうがいいと思う」

本日の第一声。

「どうしてですか？」

「簡単な事だ。俺はこいつと一緒に寝たくない。枕が飛んでくるしな」

シークを指差して言った。

「私もそう思うわ」

何故かアディも同意。

「どうしてですか？」

また同じ質問。

「スイカと理由は殆ど同じ。アステルの寝相が悪くて寝れない」

よく見たらアディの目の下になんかなり薄い隈があった。

「分かった。じゃテント二つ……」

それ以上先はいえなかった。

「ダメです」

「何でだよ」

「そんなに多くテントが置けると思います?」

よく考えればそうだ。

「分かった。テントは買わない。ただし条件がある」

「条件?」

シークが聞いてきた。

その後アディとアイコンタクトして声を合わせて言った。

「「お前らは俺（私）が寝てから寝ろ（寝て）!」!」」

「「分かりました検討します……」」」

あちらも声を合わせて詫びた。

「テントの話はこれくらいにして…次の目的地は？」

俺は全員に聞いた。

「どうします？」

「疑問に疑問で返すな」

「どうしよう？」

「疑問に疑問で（以下略」

「ティオスなんてどう？」

「ティオスって何処？」

「ティオスは闘技場の街。この街から西に一週間くらい行った所かな」

「闘技場目的でいくのか？」

「うん。だってお金が…」

「行きましよう!!」

欲に満ち溢れたアステルの一声で次の目的地が決まった

第十六話 次の目的地の決定（後書き）

更新完了！

慧「どうもこんにちは。作者にノリで名前を付けられた哀れな主人公です。つてなに言わせてるんだよ！」

作「ツツコミありがとう。次の目的地が決定しました」

慧「欲望に満ちてたけどな」

作「いいんだよ少年。この世は欲望に満ちてるからな」

慧「15年しか生きて無いくせに何言ってるんだ」

作「そんなこと言わなくてよろしい。そんな些細な事よりもこれからも『異世界な物語』をよろしく願います」

慧「よろしく願います」

でわ。

Good bye!!

第十七話 替駆の嫌いな奴

俺達は、ティオスに向けて森を歩いていた。

かれこれ1時間は歩いただろうかただ、同じところをぐるぐると回っている気がする。

「同じ所歩いてる感じがするんだけど」

シークが口を開いた。俺と同じことを思っていたようだ。

「この森は迷いの…ムグウ!!」

アステルがしゃべろうとした事はすぐ分かったので俺はアステルの口を塞いだ。

「言つな！それ以上先を言ったら駄目だ！」

「どうしてですか」

「多分認めたくないんだよ。スイカは」

シークが腹の立つことを喋ったので、蹴りを一発お見舞いした。

「ゲハッ」

シークは飛んで行き木にぶつかった。

シークのぶつかった木の後ろを見ると…

虫だ。しかもデカイ。形は害虫だ。これ以上は言いたく無い。

「うわあああああああああ！！！」

俺は叫んで誰よりも早く逃げ出した！！

何故かって？分かれ！俺は虫が大っ嫌いなんだ！気持ち悪いったらありやしねえからな！

シーク―Side

スイカはあの虫を見たときに先に行ってしまった。

僕たちはそれを追っています。

しかし…滅茶苦茶速い。

追いつけそうにない。

力を使って無い様だけど。

後ろの様子を見ても、虫は追ってきてない。

「スイカさんもう虫は追って来て無いですよ！！」

「嘘だ！追ってきてなかったら、お前らも逃げて無いだろ！！」

「私たちはスイカさんを追ってるんです！！逃げてる訳ではありません！」

アステルが頑張って説得しているけど、効果はまるで無い。

「どうせ嘘な…ぎゃあああああああああああああああ！！！」

空からまた虫が降りてきた。

3メートルくらいある一本角の甲虫。

今度はスイカの前に降りてきたためスイカは走るのを止めた。

「はぁ…はぁ…」

疲れたと…ずっと走ってたから。

「スイカさん走るのを…」

アステルがスイカに話しかけているけど無反応だった。

おかしいと思い、僕がスイカの顔を見たら…無表情。

つまり…

「立ったまま気絶してる…」

「どうする？」

「私達で戦うしかないわね」

「そうなりますね」

アステルは短刀とナイフを構えた。

アディは魔術師のようだけど…何も持っていない。

僕は箱から両手剣を出した。

「行くよ」

僕は両手剣を片手で持てる。両手剣を持って、アステルと一緒にまっすぐ走った。

虫の前で両手剣を上投げた。

それを追うように僕も飛んで、剣をキャッチし降下しながら斬る。

角が根元近くから切れた。

でも仕留められなかったため、バックステップで後ろに下がる。

アステルは甲虫の右目の近くを切っている。

まだまだといわんばかりの猛攻。

右目をちょうど短刀で刺したとき…

「アステルどいて!!」
とアディが叫んだ。

アステルは何があるか察したらしく、刺した短刀を抜いて右に飛んで逃げた。

「ファイアレイン！」

甲虫の真上から火が降り注いだ。

軽い地獄絵図…

僕はそう思った…

甲虫を倒したときスイカが目を覚ました。

「あれ、俺何してたんだっけ？」

と言ったスイカをアステルが思い切り殴り飛ばしていた。

しばらく進むと、森を抜け、休憩場についた。

明日はどうなるんだろ…僕はそう思った。

第十八話 幕間

俺は飛び起きた。

悪夢を見たからだ。

どんな悪夢かって？

アステル達と虫に追われてた。

何かもう寝付けろ気がしない。

俺は気分が良くないから外にでた。

もうすぐ夜明け。

ふとあることを疑問に思った。

——このままこっちの世界にいていいのだろうか？——

向こうの世界に帰らなくても良いのか…？

こちらの世界にいたほうがいいのか…？

どっちだ？

俺がいなくても向こうは兄達がしっかりやるだろう。

しかし、多少なりとも心配するのでは無いか？

次々と浮かんでくる向こうの世界の事で悶々としながら、俺は夜明けを迎えた。

夜明けを迎え、しばらくたった後俺達は休憩場を後にした。

その後も俺達は旅を続け、とうとうティオスに着いた。

ティオスの街並みは、ヨーロッパのような町並みで、前の街とあまり変わらない。

奥の方に階段が続いており、その上に巨大な闘技場らしきものがある。

街は活気に満ち溢れており、声に満ちていた。

俺達はとりあえず静かなところに行った。

——街のはずれ——

「そつえば闘技の開催日は？」

「毎日やってるよ」

「そうなのか」

「うん。闘技場とはいっても人同士が戦うのってあまり無いよ。殆どがモンスターとだから」

「それじゃ賞金でないだろ」

「今日開催されるのは、人同士の闘技だから」

「へえ…」

「速くエントリーしに行きましょう」

「そうだな」

そうして俺達は闘技にエントリーしに行くのだった。

受付も終了し、待ち時間――

「まさか団体まであるとはな…」

闘技には個人、団体両方あった。

団体と言っても三人で一組だ。

当然一人余る。

まあ分かってると思うが…

俺が余り者…

そして個人に出場する。

勿論だが予選というものはあった。

しかし予選というのもかなり楽だった。

能力無しでも勝てたからな。

そして…もうすぐ始まる。

ちなみに既に団体は始まっている。

しばらく経ち、開始を合図する警報（？）が鳴った。

これから控え室へ行かなければならない。

さあ行くか…

第十八話 幕間（後書き）

今回はかなり短いですね…
次は闘技大会個人戦からです。
でわ。

第十九話 闘技場にて 第一回戦（個人）（前書き）

ユニーク6000突破です！

ダメ作者が書くこんな作品を読んでもいただき光荣です！
これからも読んでいただけると嬉しいです！

*ちなみに第二作目製作中です。

ジャンルは異世界で学園モノ。

今回とは違い、恋愛の要素も入れてみようかな？なんて考えています。

期待はあまりしないで待っていてください。

多分6月連載開始ですので…

この作品と平行して書くという形になると思います。

これ終わりそうに無いから…

第十九話 闘技場にて 第一回戦（個人）

待ち時間が終わり、俺の出番となるので、闘技場の控え室へ向かった。

控え室は、ごく一般的な宿と同じ広さ。

石造りで牢屋を思い浮かばせる。

しかしベッド、机、洗面所、風呂場、ポットもあり紅茶を入れることも出来るようで快適な生活は遅れそうだ。

ちょうどいい高さに窓があり、闘技場の様子も見ることが出来る。

外からは実況の人の声がする。

実況の声は、ドラ。ンボールに出ている審判の声に似ている。

「1回戦第1試合目、出場者…」

試合は始まっているようだが、別に興味は無いので見ない。

とりあえず紅茶を入れて、飲んでいた。

しばらく経つと、係員がソックをしてきた。

「試合が始まる…」

それだけ言つと、何処かへ行った。

じゃ行くか…

蓮華を腰にさし、闘技場へ向かう。

「一回戦第二試合目、出場者…」

俺と相手の名前が言われ入場する。

二人が入ると、歓声が沸いた。

相手は、二メートル近くあるでかいおっさんで、手に鎖付きの鉄球を持っている。

「なんだ？お前が初戦の相手か…こりゃ貰ったな…」

なんて呟きが聞こえた。

相手を見た目で判断する時点でこいつは終わっている。

挑発したら絶対乗ってくれるな…

そこで俺は、発言した。

「降参しないか？」

「はあ？なに行っただお前？」

「そのまんまだよ。それとも降参の意味もわかんねえのか？」

「馬鹿にしてんのか!？」

「ああ。馬鹿にしてる。見た目で相手を判断し、力量を測れないお前は屑同然だから」

「このガキイ!!」

おっさんは簡単に挑発に乗った。

やべえこいつ本物の馬鹿だ…

おっさんは俺に向かって鉄球を投げてきた。

俺はその鉄球を左にヒョイと避け、鉄球についている鎖を抜刀して切った。

鉄球はそのまま飛んで行った。

俺はあえて距離を詰めなかった。

というか距離を広げた。

おっさんがどういう行動に出るか見てみたかったからだ。

おっさんは鎖をもって、呆然としている。

普通はこういう対策は取っておくべきだと思うが…

しばらく放っておくと、

「降参します」

おっさんが頭を下げてきた。

その時点で勝負が決まり、実況が勝者（俺）の名前を告げた。

観客も呆然としている。

まあ当たり前だと思う。

二人とも無傷で勝負が決まったのだから…

第十九話 闘技場にて 第一回戦（個人）（後書き）

更新完了！

作「いやもう疲れた…一日で二話だからね。」

彗「お前明日テスト二日目だろ。勉強しろよ」

作「やめろ！作者を勉強なんて言葉で縛り付けるな！」

彗「はいはい…じゃテスト頑張れよ…どうなっても知らんがな」

作「いいんだよ…作者は受験前すらほぼ勉強しなかったほどの筋金入りの勉強嫌いだからな。勉強しないでテストを受けるのは慣れる」

彗「それ自慢する事じゃないぞ…」

作「はっはっは！何言ってるか全然聞こえない」

彗「こんな馬鹿は放っておいて…これから『異世界な物語』をよろしく願います！感想も是非送ってください！作者はいつでも感想を待っています」

作「テストが何だってんだ…」

彗「作者は壊れました。でわ。そうなら…あっ！噛んだ…」

第二十話 闘技場にて 第二回戦（個人）

一回戦おっさんと対戦

結果 無傷で勝利。

したのはいいんだけど…一回戦が終わったら、次は二回戦だ…

今日は二回戦で終わる。

明日、三、四、回戦をするそうだ。

明後日、準、三位決定戦、決をするそうだ。

つーか参加者多すぎ…

予選とか意味ないじゃん…

闘技場で三日つぶすなんて聞いてないぞ。

まあ旅の行き先が決まってない俺達には好都合かもしれないが…

おっともうすぐ出番だそうだ。

俺は二回戦に出るために会場へ向かった。

「二回戦第一試合出場者…」

俺と相手の名前が呼ばれた。

俺と相手が入場する。

かなり細身の女性だ。

薄紫色の髪を後ろで二つにわけ、瞳の色はピンク。

服装は藍色のジャケットに黒いズボン。腰には四丁の拳銃がさしてあった。

相手は銃使いのようだ。

俺はあらかじめ《蓮華》を抜いておく。

ぷわわわ〜んかなり気の抜ける開始の合図と同時に、相手は銃を抜き乱射してきた。

弾には実体はない。

つまり、空気の流れをと気配を読んで避けなければならない。

しかも、弾に限りはないようだ。

厄介な相手だと内心で愚痴をはきつつも、横に飛んでかわしながら少しずつ前に出る。

向こうもこちらが近づいているのが分かるらしく、少しずつ後ろに下がっている。

しかし、乱射というのは、実際かなり疲れるのである。

疲れてきて、ペースが遅くなったら仕掛けると作戦を決定。

そして暫く時間を稼いでいると、相手も疲れてきたようだ。

弾の飛んでくるペースが遅くなっている。

そろそろ頃合だと思い、俺は横に飛ぶのをやめ、距離を一気に詰めた。

そして、蓮華の峰で打った。

女性は気絶し、その場に倒れた。

歓声が上がった。

嬉しくないけど。

実況が勝者の名前（俺）を告げる。

控え室へ向かう。

向かう途中にまた変なものに出くわした。

身長は百五十センチメートルくらいでおそらく14〜15歳だろう。黒髪で瞳も黒。髪は短めで、かなり活発そうな印象がある。

「お前が、スイカって奴だな!？」

「違う」

適当にやり過ごすことにした。

「やっぱりお前だろ!？」

「いいや違うな。俺の名前は某だ^{なにがし}」

「ナニガシなんて奴が控え室のところにいるわけ無いだろ！」

「俺はあれだよ…闘技に出てる相棒の部屋に泊まるんだよ」

「嘘だろ！？」

「嘘じゃない」

「いいや嘘だ！」

「嘘じゃねえっ！嘘嘘うるせえんだよ！俺は忙しいんだ！俺は部屋に帰って寝るんだ！じゃあな！」

怒鳴ってから俺は音もなく走り去った。

控え室に着くと、シャワーを浴び、ベッドに身を投げ、意識を沈めた。

第二十一話 闘技場にて 第一回戦（団体）

アステルSide――

団体戦が始まりました。

個人とは違い、二日で終わります。

第一試合目が始まったようです…

なんて緊張感の無い開始の合図なのでしょう。ラッパですよ？気が抜けます。

私達は第二試合目ということで、控え室からは出ています。遅れたらダメですね。

「それにしても…なんでこんなに人が集まるのでしょうか？」

「アステルみたいにお金目当ての人や単に闘いたい人や自分の実力を測りたい人があつまってるからだよ」

シークさんは答えてくれました。

「単に戦いたい人達の気が知れませんか」

「僕はアステルのお金に対する欲望が…」

「何か言いました？」

「何も言って無いです!!」

でも何か聞こえた気がしました。

まあ気のせいでしょう。

しばらく雑談をしていると、私達の名前が呼ばれました。

私達は闘技場に出ます。

相手はの顔を見ました。

ちよつと人格変えます。よろしいですね？

ちなみに皆さんに拒否権は無いです。

でわ。

シークSide

僕達は闘技場に出ました。

相手は鉄鎚を持ったオヤジAとサーベルを持ったオヤジBと大剣を持ったおっさん。

「あ!この間のおっさん!!」

「!!!!」

アデイも僕もびっくりした。

それも当たり前。アステルの口調が変わり、声にもドスが利いてる。

「この間の嬢ちゃん!?」

向こうのおっさんもビックリ。

「よう。また会ったな!」

アステルが怖い…

おっさん達はアステルの挨拶を無礼な無視し、会議をしている。

会議も終わったらしく、向こうは全員武器を構えている。

僕達も武器を出して構えると…ぷわわわ〜ん。

開始の合図!

僕は、オヤジABに向かって走った。

しかし、おやじBはアステルの方へ向かった。

僕はすれ違いざまに両手剣を振った。

おやじAはそれをかわしたようだ。

僕が振り向くと、おやじAは攻めてきた。

まず、踏み込んで一振りされた。

それをバックステップでかわし、上に剣を放り投げ、それを追うように跳び空中でキャッチして振り下ろす。

攻撃はかわされ、剣で地面を叩いたため砂煙が舞った。

こちらからは向こうが見えるので容赦なく突っ込んだ。

僕は、おやじAをすれ違いざまに切った。

勿論殺してはいない。

そのままアステルの方へ走っていったが、既におっさんとオヤジは倒されていた。

第二十二話 闘技場にて 第二回戦（団体）

アデイSide――

最近、影が薄くなってきました。

場所は控え室。

「あの〜アステルさん？」

シークがアステルに話しかけていた。

「はい。何でしょう？」

「さっきのはなんですか？」

「人格豹変ですが何か？」

「人格豹変って自由にできるの？」

「できますよ。変身ヒーローみたいな感じで」

「普通無理だよね……」

「できる事はできるんです」

「はい分かりました……」

なんかこれ以上聞いてきたら殺るよ？みたいな黒いオーラが…

話しかけられない雰囲気にも私もシークも話しかけられず、紅茶を啜っていた。

そんなこんなで一回戦は終了し、二回戦目となった。

二回戦第一試合なので闘技場に向かった。

実況が私達の名前を告げた。

私達と相手は闘技場に出た。

相手は、女性が二人、男性一人。

こちらと同じ。

全員が武器を構える。

私は武器無いけど。

ぷわわわん。

やっぱり気が抜ける。

私は詠唱を始めた。

向こうにも一人の魔術師（女）。

私は魔術師に魔術を放つ。

《ファイアボール》

四つの火の玉が相手を襲う。

相手の魔術師はまだ詠唱中：火の玉は相手に当たり、相手は気絶した。

ちなみに私の売りは詠唱速度の速さ。

威力はなくても、詠唱が速い分、有利に持っていける。

しかし私は、味方に当てたらいけないから、もう役目は終わり。

アステルの方を見てみたが、既に決着はついていた。

シークの方を見ても既に相手は気絶していた。

アステルSide――

私は、相手の女性に向かって走っていく。

向こうの女性の武器も双剣。

相手に、先手を取られてしまった。

右の剣で切りつけられる。

それをバックしてかわす。

まだ相手の攻撃は続く。

左の剣で刺してくる。

それを左に飛んで回避し、距離を開ける。

距離を開ける際にナイフを投げ相手に追撃を許さなかった。

自体は振り出しに戻ったが、今度はこちらが攻める。

まず私は、右に持った短刀を左斜め下に振った。

ただ、これはかわされることを承知の上で。

相手は案の定、右に飛んでかわした。

そこで体を回し裏拳。

それもバックステップでかわされた。

しかしそこで、前に出て相手の女性を切りつけると見せかけ鳩尾を蹴る。

相手はそれを受け、気絶した。

戦闘終了。

闘技場をあとにし、控え室へ向かって皆、意識を闇に沈めた。

第二十三話 新しい仲間

替駆Side――

朝。起き心地は最高だった。

とりあえず洗面などをして過ごし、闘技場へ向かった。

対戦相手と俺が闘技場に入った。

「あ、やっぱりお前がスイカじゃねーか！」

昨日の少年だ。えつと確か名前は…リユーだったつけ。

ぷわわわ〜ん。

開始の合図とともにリユーが走ってきた。

向こうは素手。

蓮華を抜く暇もなかった。

正拳突き。

裏拳。

手刀。

肘打ち。

蹴り。

膝蹴り。

完全な格闘戦となった。

しかし、結構やるな…

などと意外と戦いを楽しんでたりする。

そんな中…

闘技場の門…つまり魔物を閉じ込めている門が爆発した。

ドォーン…！という爆音と共に観客の悲鳴が重なり、マズイ事態となった。

観客がどんどん逃げ出す中、魔物がウジャウジャと出てきた。

冗談じゃない。

俺は蓮華を抜いた。

「面倒だ。一気に片付けてやる…」

《奥義 龍旋刃》

《風旋刃》の上位技。

蓮華を一振りする。

たったそれだけ。

それだけでも、魔物全てを片付けるのは十分だった。

なぜなら…そこで巨大な竜巻が起きたから。

盗賊とやったときは比べ物にならないほど大きな竜巻が出現した。

観客は幸いそこにはいなかったようだ。

竜巻が消えていき、魔物がドサドサと落ちてくる。

「お前すげーな…」

「これでも本気じゃない」

奥義はフルパワーで使えば街一つ軽く吹っ飛ぶだろう。

「やっぱスイカにゃ勝てねーわ」

とリユーは感嘆していた。

「俺が全く本気出して無いことに気付いてたか…」

気付かれないようにしていた筈なんだが。

「見りゃ分かる。人が本気だしてるか本気出してねーかくらい」

へえ。見かけによらず結構すごいな。こいつ。

「…でもな。上には上がいるって知ってるか？」

「ってことはお前より強えー奴はまだいるのか」

「ああ。いるさ」

そんなことよりこれどうすんだ？

俺は壊れた門と魔物を見てそう思った。

アステルSide――

闘技が終わり、控え室に向かっている途中でした。

爆音が響き、人の悲鳴が聞こえます。

とりあえず、爆音の聞こえた方へ向かいました。

爆音のもとには闘技場だそうです。

闘技場を見ると、スイカさんと男の子。

近くには魔物の死体が転がっています。

とりあえずスイカさんのところへいきました。

「何があっ たんですか？」

「門が爆発して、魔物が出てきたから片付けた」

ずいぶん適当にまとめられましたが、大体分かりました。

「スイカこれ一人でやったの？」

シークさんがスイカさんに話を聞いています。

「そうだが？」

「凄すぎる……」

「そんな事はどうでもいい。それにしてもこれどうすんだよ？」

「どうしようもないし」

「騎士団に任せればいいんじゃない？」

「」「誰？」「」

私、シークさん、アデイが声をそろえました。

「俺はリユーだ」

「よろしく」

とシークさんはリユーさんに話しかけている。

「まあ、騎士団に任せるってのはいいと思うわ」

「じゃ、逃げるか？」

「そうね」

そうして私達は逃げました。

そういえば何か忘れてる気が…

「あー!!」

「なんだ？どーした？」

「リユー聞くな…死ぬぞ」

「何で？」

「私のお金えええええ!!」

この怒りは、いつか誰かに八つ当たりして晴らしてやります…

第二十三話 新しい仲間（後書き）

ちよつと次回から書き方変えたいと思います。
こんな感じからこんな感じに。

俺は

ではなく

スイカは

みたいに。

書き方について注意されちゃったので…

第二十四話 VS 騎士団

スイカ達は、闘技場を出るために走っている。

「そう言えばさ…なんで俺達走ってんだっけ？」

控えめにスイカは聞いた。

「皆、騎士団と関わりたくないんだよ…」

スイカの質問にシークが答えた。

「私、騎士団と関わるのはちょっと…」

「俺も同感」
ドーカン

「……」

騎士団にはアステルは喋らなかったが全員関わりたくないようだ。

「そんなに嫌われてんのか？騎士団って奴らは…」

「騎士団は事件が起こったとき、必ず下の人間を疑う。たとえば、上の人間がやった事だと分かっているもね…」

「それじゃ下の人間は…」

「一方的に虐げられるだけ」

それは嫌でも関わりたくはないな… スイカはそう思った。

「それじゃ今回の事はどうなるんだよ？」

確かに今回は容疑者、被害者五度時に二人以上いる筈。

「魔物を片付けた奴… スイカを騎士団に入れようとするだろうね。門を破壊した奴は… とりあえず適当に捕まえて牢獄に入れられるだろうね」

「そりゃ嫌だな…」

うんざりしたようにスイカは言った。

まもなく闘技場を出ようとしたとき…

「お前達か！？ 門を破壊した奴は！？」

大量の50人位騎士がいた。全員同じ格好であり、誰が話しているのか分からなかった。

「いや違う。俺達は逃げ遅れた観客だ」

「逃げ遅れた観客がそんな落ち着いてるわけ無いだろう」

確かに… 痛いところを突かれ、全員が反論できなくなった。

そんな中…

「うるせーよ！」「」

と言って騎士に踊りかかる奴が二名。

勿論アステルとリユーだ。

アステルは怒りに身を任せているらしく、人格豹変している。

人格豹変したアステルは、鎧の隙間をかき回し、騎士を次々戦闘不能にしている。

リユーは、楽しそうに「キャハハハ！」と笑いながらちょこまかと動き騎士団を鎧越しに殴り、蹴っている。

しかも、驚くべきは鎧が殴り蹴ったところがへこんでいる事だった。

また厄介事が…スイカはそう思い、うんざりしているものの、蓮華を抜いた。

「結局やるんだ…」

ちょっと呆れながらもシークは両手剣を手を取っている。

スイカは、身体強化はしないという制限つきで戦闘を開始した。

ちょうど正面にいた相手の目の前に行き抜刀切り。勿論急所は外し殺さないようにしている。

《疾風閃》

抜刀切りから、続けて横切り。

《疾風重ね》

《疾風重ね》の後、スイカは飛び上がりながら一人切る。

《風翔刃》

更に落ちると同時に、重力を乗せて剣を振り、また一人切った。

《風襲刃》

《風襲刃》の後、しゃがんで攻撃をかわすと同時に、体を回し風を起こす。

《風破刃》

これで全員片付ける筈だったが、一人にかわされた。

内心舌打ちし、スイカは、次の標的の元へ走りに行こうとしたとき…

「ラストオ！」

と言うリユウの叫び声でスイカの標的は殴られた。

「片付いた訳なんだが…こいつらどうすんだ？」

気絶している騎士を指してスイカは言った。

「「ほつときやいいんじゃないね？」」

アステルとリユーが声をそろえた。

裏のアステルとリユーは気が合うな。とスイカは思った。

「ほっておくというのは賛成ね」

アディの意見。

「ほつとくか」

スイカは珍しく後始末を拒み、闘技場を後にした。

第二十四話 VS 騎士団（後書き）

描き方変えましたが、あまり変わっている感じがしないでもありませんが、これからはこの描き方でいきたいと思います。

第二十五話 料理係に任命された

闘技場を後にし、走りながら「何処へ行こうか？」とスイカは聞いた。

「ラーレ港なんてどう？この街から北へ三日くらいで着くしね」

シークが提案した。

「港町か…」

「そりゃいいな！」

スイカの言い切る前にリユーが賛成をした。

「何で？」

「ラーレ港は活気があるんだよ！」

「それだけ？」

「それだけだ！」

リユーの発言に溜息をつきつつ、スイカはとりあえず賛成の意を示した。

「じゃあ行くか…」

走って街を抜け、ラーレ港へ向かう。

時刻は昼間。

「なあなあ…腹減った…」

元気の無いリユーはひたすらそれを連呼している。

「仕方ねえだろ！本来四人分しか食料はねえんだ！お前のせいで全員が餓死したらどうするんだよ！」

リユーの連呼に痺れを切らしたスイカは苛立ちをあらわにして怒鳴った。本当の話、スイカも腹が減っているのだ。

「スイカ、分かったからご飯にしよう。君もお腹減ってるよね」

「食料はどうするんだ？」

スイカが最も心配していた事を聞いた。

「間食さえしなければ三日くらいは心配ないよ」

「そうか…」

「飯い！」

リユーの元気が戻ってきた。

「それはそうとして…リユーお前料理できるか？」

「ん？まあ出来る方なんじゃね？」

「何で疑問系なんだよ」

「他人に食わせた事なんかねーからな」

「じゃあできるほうでいいな」

そして…料理をするメンバーが決定した。

スイカ、リユー、アステルの誰かだ。

シークとアディは壊滅的なので論外である。

「仕方ないですね…料理をしてもらいたい人の名前を一斉に言いましょう」

「せーの…」

「『『『スイカ（さん）！！！！』』『』『リユー』」

決定。

「何で俺なんだ？」

「そりゃあスイカが上手だからじゃない？」 「スイカさんが一番上手だと思うからです」

「スイカの料理は美味しいから」 「何となく」

皆が口々に意見を言っていく。スイカは最後の意見が納得いかなかったが、料理を作ることにした。

「分かったよ…作りゃいいんだろ…」

とりあえず、ハンバーグと野菜の炒め物を作った。

「やっぱり…どうやったらこんなに…」

シークがぶつぶつと何かを言っていた。

「俺が作ったのよりうめーな！」

リユーも絶賛。

「……………」

アステルとアディは何も言わない。

食事が終わった後、皆が言った。

「……………」
「これから料理は任せ（た！）（ます！）……………」

「任されたくない…」

「じゃあ僕の料理食べる？」

「嫌だ…」

スイカは思い出したように、顔を暗くした。あの時走った戦慄。

皆で二度と口に入れないと誓ったさ。

「分かったよ…」

そして、スイカは料理係となった。

第二十六話 魔道具

美味しい昼食で食欲を満たした後、スイカ達は、ある程度整備された道を歩いていた。

魔物には遭っていない。

稀に、馬車や商人とすれ違う。

後ろでは、アディとアステルとシークが何やら話している。

スイカは話す事は特になく、無言で歩いていた。

無言でただ歩いているスイカに声が掛かった。

「スイカは魔道具無しで戦ってるよなア…」

「魔道具？」

また厄介そうな用語が…などと思いながらもスイカは聞きなます。

「魔道具ってのは、身体強化の効果のある一種のお守りってところだなー」

手首に付けている黒いブレスレットを見せながら言った。

「へえ…」

「身体強化だけじゃねー。確か他にも…結界を作ったりするやつも

あるな―」

「結界を？」

「街や村には最低一個はあるな―。たまに壊れて街が魔物に襲われることもあつけど」

例の狼の件を思い出した。

（じゃあちようど魔道具が壊れてる時に行ったのか…）

とスイカは推測した。

「そういえば、皆が魔道具って持ってたのか？」

「一部の人間だけしか持ってね―。ただ魔術師の家には一人一個の魔道具が配られるらしいな。後、騎士団の連中くらいだ」

「お前は魔術師じゃないだろ？」

「俺は能力者スキルマスターだからな。魔術師の家の生まれだから持ってんだよ」

「そういえば…」

スイカはシークの言っていた事を思い出した。

―魔術師の子供に能力者が生まれるらしいよ―

スイカはそこで会話を打ち切ろうとしたが…話を元に戻された。

「何でスイカは魔道具無しで魔道具を持つてる俺と互角に戦えるんだよ？」

「あの時本気出してなかった奴に言われる筋合いは無い」

「お前も全然本気じゃなかっただろ」

「俺は力で身体強化できるんだよ」

「へえー」

「もうこれで分かっただろ」

今度こそ会話を打ち切った。

その後も何時間も歩き続け、休憩場に着いたのは、日が沈んでからだった。

「休憩場にある飲食店」

やはりどの休憩場にある飲食店の内装は殆ど同じであった。

壁に絵がかけられ、丸い机の上には白いテーブルクロス。日本にあったレストランと変わらない。

やはり今は夕食時で、店の中は人で溢れていた。

受付を済ませた後、店員に案内され一番奥の席に座り、スイカの左隣にリユー。右隣にアステル。向かいにシークとアディ。

ちなみにスイカの頼んだ食べ物、パスタみたいな物。アステルとシークも同様。

アディとリユーは、ステーキみたいな物。

頼んでいた料理が運ばれてきた。

運ばれた料理を食べ終え、スイカ達が話していると…

店の扉が乱暴に開かれ、三人ほど騎士団が中に入ってきた。

真ん中の騎士の手には紙切れが一枚。

「ここにティオスからきた連中は居ないか!？」

店の中は静まり、誰もティオス方面から来た人は居ないと言つ事を示したが…

「では、ここに銀髪の少年がいないか!？」

皆がキョロキョロし、全員がスイカを凝視する。

「お前か!」

騎士団の一人がスイカを指差して言いスイカの目の前へ行く。

そこで認めるスイカではない。

「違います」

あくまで落ち着いて言ったが…

右の騎士が紙を見て、「そっくりでは無いか」と言っている。

試しに紙を見てみると…全く別人としか見えない似顔絵が書いてあった。

「どうみても違っただろうが!!」

と少し怒鳴りそうになったが、落ち着いて言った。

「どうみても違います」

右の騎士が首を傾げたが「やっぱりそっくりでは無いか」と言っているが…

「似ている似ていないの問題ではない!」

と真ん中の騎士が言い、スイカを連れて行こうとスイカの右腕を引っ張った。

スイカは抵抗しなかった。

「スイカさん!？」

アステルが騎士に聞こえないように言った。

それにスイカはこう答えた。

「ここじゃ駄目だ。外でやる」

そしてスイカは、騎士に手を引かれたまま、店を出た。

第二十七話 再びVS騎士団とVSリユール

騎士団に手を引かれ、店を出た。

店を出て、休憩場を出ようとしたとき、スイカは風を起こして周りの騎士に尻餅をつかせ、さらに力で身体強化をして、掴まれている手を思いきり振った。

身体強化をしている状態で思いきり腕を振ったため、騎士は手を離し、吹き飛んでいった。

吹き飛んでいった騎士は放っておき、風で尻餅をついている騎士二人の鳩尾を鎧越しに殴る。

流石に素手で鉄を殴るのは身体強化をしているのも痛いので、手には風を纏わせて、痛みがこないようにした。

吹き飛んだ騎士は巨木に背中を打ちつけ、気絶していた。

スイカとしては鎧越しなのに木に騎士が気絶したことよりも、巨木が折れないことの方が疑問だった。

その後、人目に触れないよう、休憩場から少し離れたところにある巨木に、猿轡を噛ませ縄で縛りつけて置いた。

休憩場に戻り、店へ戻る。

俺が無傷で戻ってきたことに、店中の人間が驚いていた。

多分、騎士団を倒したからだろう。とスイカは推測した。

けれども別に気にしないで、アステル達の元へ行った。

「終わった」

「時間かかったなー」

「うるさい。人目のない所まで行ってたんだよ」

「その場で殴ればよかったのによー」

「店に迷惑がかかるだろ」

リユーを適当にあしらう。

その後はシークの質問が飛んできた。

「騎士はどうしたの？」

「人目のない所に行って、猿轡をかませた後、巨木に縄で縛り付け
といた」

「結構酷いね…」

「そうか？」

スイカは疑問に思った。何故襲ってきた連中に気を使う必要があるのか？と。

「それより、もうテント出さない？場所がなくなるんじゃない？」

アディの提案。皆それに同意し、店を出た。

テントを出し、寝る準備をした。

リユーは寝る準備をした後、すぐに寝た。

以外に寝相は悪くない。というか一切動かなかった。

スイカも意識を闇に沈めた。

〈朝〉

アステルの件があつてから、スイカは早起きをするようになった。しかしまだ夜明け前。

シークはまだ寝ている。リユーはもう既にいない。

スイカはシークを起こさないように、テントを出た。

テントの外では、リユーが瞑想？をしていた。

リユーはスイカに気づき、「組み手をしねーか？」と聞いてきた。

スイカは無言で了承し、場所を人気のない場所に変える。

勿論素手でやるわけにはいかないので手袋グローブを借りた。

ちなみにルールは、力の使用は無し。

リユーは手首に付けていた魔道具を外した。

「スタート開始！」

スイカはまず、掌底から入った。それを避けられ、リユー肘打ちをされる。

スイカは肘打ちを避けると同時に、裏拳。

裏拳が入り、リユーが吹っ飛ぶ。

リユーは受身を取り、こちらに走ってくる。

それを正拳突きで迎撃。

リユーはそれを避け、左から回し蹴りを繰り出す。

スイカはしゃがんで、足払いを掛ける。

回し蹴りにより、軸足は一本で、さらに跳んで避けることも不可能。

リユーは転んだ。

「終わり。まだやるのか？」

「まだ本気じゃねーし」

「じゃやるか」

スイカはもう一度構え、また組み手を開始した。

スイカは何回か負けそうにはなったが、結局全て負けなかった。

「クソーやっぱ化けモンだなー」

一度も勝てなかったリユーはかなり悔しそうだった。

「お前はこれから強くなるさ」

スイカは適当に褒めた。

テントに戻ると、シークたちがテントを片付けていた。

第二十七話 再びVS騎士団とVSリユ（後書き）

今回は戦闘に力を入れました。

どうでしたか？

良くても良くななくても感想を送ってくださると、大変嬉しいです。
でわ。

第二十八話 商人と護衛の任務

三日が経ち、スイカ達は港町に着いた。

ちなみにリユーとの組み手は、日課となった。

港町は、本当に活気があり、人で溢れている。

着いたのはいいが何もする事がなく、ただブラブラと町を回った。

とりあえず町を回っていると、見ないほうが良かったと思うものを発見した。

指名手配書。

スイカ。

懸賞金 1000N

ちなみに、写真ではなく絵だった。

ぶっちゃけると全然似ていない。

何故だろう指名手配されたのはスイカだけだった。

「何で俺だけ？」

「闘技場のときが原因だろうーな」

「いやそれだつたらお前も共犯だろ。騎士団ボロボロにしたのは誰だよ」

そんな会話をしていたとき…

「見つけたぞスイカ！」

「またお前らか!!」

また騎士団。

おそらくは、闘技場で叩き潰してきた騎士達だろう。

スイカはとりあえず《蓮華》を抜刀した。

《風旋刃》

小規模な竜巻を起こし、全員を気絶させた。

「何でこんなとこまで追ってくるんだか…」

《蓮華》を鞘に戻したときだった。

「お兄さん腕が立つねえ」

そこには、女性が立っていた。

桃色の髪に、桃色の淵眼鏡を掛けている。

「よっ」

リユーがその女性に気付き、呼びかけた。

「あら。リユー。闘技はどうだった？」

「こいつに負けた」

リユーは俺を指差して言った。

「へえ。リユーを負かすなんてね」

感心したように言った。

「リユーって強いのか？素手でしか戦ったことないから知らないんだけど」

「強いわよ。確か武器は…双節棍よね」

リユーの武器は双節棍^{ヌンチャク}か…。

「そういえば…何しにこの街に来たんだ？」

「大陸を渡ろうと思って来たんだけど…そうだ！私達の船を護衛しない？報酬は…そうね。使った船をあげるけど」

「船なんてくれてもいいのか？」

「いいわよ。また買えばいいし」

「じゃあ一応は契約成立だな。そういえば名前は？」

「カウフよ」

「「「!!!」」」

リユーと俺以外が驚いていた。

「何で驚いてんだ？」

「あのカウフよ！」

アデイが血相を変えている。

「あのカウフと言われても…」

スイカには実際分らない。

「カウフと言えば、商人界屈指の商人よ」

商人界というのが分かるような分らないような…

「まあ…とにかく有名なんだな」

無理やり納得。

「じゃあ港に行きましょう」

そしてスイカたちはカウフの護衛をする事になった。

「立派な船だな」

港に行くと、立派な船があった。

「なつかしいなこの船。まだ持ってたのかよ」

「ねえ…リユーとカウフって何で知り合いなの？」

シークがリユーに聞いた。

「そりゃあ、護衛の任務を貰ったからな」

「リユーって傭兵だったの？」

「ああ。十から十三まで傭兵やってたな」

「リユーって今何歳？」

「十四だ」

「というか十歳で傭兵って…」

リユーとシークが何やら話している。

「さ、乗ったら行きましょう」

カウフのその一言で、俺達は船に乗り、大海原に出た。

第二十八話 商人と護衛の任務（後書き）

PV400000アクセス超えました。

ユニーク100000アクセス超えました。

ありがとうございます。

これからも『異世界な物語』を読んでいたけると嬉しいです。
感想もよろしく願います。

第二十九話 誓駆は人間じゃねえ！

「なあ…アステル。やっぱり護衛を頼むって事は…」

「はい。この辺りは魔物の噂や幽霊船の噂が絶えません」

やっぱり…とスイカは少し肩を落とした。

何より厄介なのは、船の上で戦わなければいけないこと。

下手に力を使えば、船が壊れるからだ。

どうしようかと、検討しているとき、前方に船を軽く越える大きさのイカが出てきた。

「クラークンですけど…私じゃ無理です」

「俺も無理。船が転覆しかねないからな」

「俺も無理だなー俺素手に近いしよー」

「僕も無理」

「私だけ？」

「そつなるな」

「はあ…」

アディは詠唱を始めた。

スイカも《蓮華》を抜刀した。

まず《蓮華》を右に薙いだ。

《風刃》

蓮華からカマイタチが飛んだ。

一本の足半分ほど切ったが、またニユルリと足が出てきた。

更に左に薙ぐ。

蓮華を振り回しているようにしか見えないが、ちゃんとカマイタチが飛んでいる。

足を何本も切り落とすも、減っている気配がしない。

スイカが大型モンスターと船の上で戦えない理由。

周辺に害を及ぼさない技が《風刃》しかないのだ。

しかも《風刃》は殺傷力が低い。

まだかまだかと、《蓮華》を振り回す。

アディの魔術が発動した。

「フレイムアロー」

頭上に一本の巨大な火の矢が出現し、クラーケンへと発射される。

火の矢は直撃し、クラーケンを火葬した。

「ふう……」

「終わったな」

スイカは《蓮華》を納刀した。

「クラーケンなんて初めて見ました」

「俺も初めてだなー」

「私も初めて」

「え？あいつ頻繁に出るんじゃないのか？」

「出ませんよ。この辺りで噂になってるのはサメです」

「サメか……じゃあよあのイカの死体に集まってるヒレを出した生物は？」

「サメ……ですね」

「やっぱりな……」

どうする？

↓避けて通る。

喧嘩を売る。

「避けて通れるか？」

「無理でしょう」

「無理だなー」

「無理だよ」

「無理よ」

「そんな一蹴すんなよ…」

スイカはちよつと悲しくなった。

「魔術でやるからいいわ」

アディは詠唱を始めた。

しばらく経つと、結局気付かれず魔術が発動した。

「ロックスピア」

頭上に巨大な岩の槍が出現した。

岩の槍は、サメを大群ごと貫いた。

巨大な波が起きる。

「お前は何してんだよ！」

「あ、間違えた」

「間違えたで済むかアア！！」

《蓮華》を抜刀し、半ばやけくそに風を起こした。

津波が…割れた。

「嘘だろ！！？」

スイカは自分でやった事に自分で驚いていた。

「もうスイカは人間じゃねー！」

リユーは笑っていた。

その後はモンスターにも会わず、大陸を渡る事が出来た。

第二十九話 誓駆は人間じゃねえ！（後書き）

連載開始から1ヶ月経ちました。

早いですね。

これからも応援よろしくお願いします。

第三十話 異世界人はトランプと言うと必ず全員が同じような反応をする

大陸を渡り、港に船を止めた後、カウフは礼をスイカ達に言った。

「ありがとう」

「ああ。元気だな」

「それじゃ」

カウフは何処かへ行った。

「なあ。船どうすんだ？」

「箱ボックスに入れましょう。ちなみに私の箱に入りませんよ？」

「じゃあ僕の箱に入れとくよ」

そう言った後、シークは船を箱に入れた。

どうやって入れたかは聞かないで欲しい映像をスイカ達は見た。

シークが戻ってきた後スイカは聞いた。

「じゃあこれから何処行くんだ？」

「もう夕方だし宿に行かない？」

「早くないか？」

「トランプがあるでしょ」

「ああ。あつたな」

とりあえずは誰も反対する者はいなかった。宿へ向かい部屋を取ったら…^{ゲーム}遊戯の幕開け。

「じゃあトランプするぞ」

「とらんぷってなんだ？」

異世界人はトランプと言うと全員が全員同じ反応をするようだ。スイカは新たな発見？をした。

トランプ（ババ抜き）のルールをリユーに教え、ババ抜きはスタートした。

ちなみに罰ゲームあり。

優勝者は、最下位の者に何らかの命令を一つ下せる。という最下位の者にとっては屈辱的な罰ゲーム。

順番は…

ス↑リ↑シ↑アデ↑アス↑ス

まずババはスイカが持っていた。

スイカの持ち札は3枚。リユーは2枚。シークは3枚。アディ3枚。

アステルは奇跡の4枚。

これだけ多人数でやって4枚余るってのは…結構シヨックだ。

リユーがスイカのババを迷わず持って行った。

リユーが明らかに残念でしたっていうオーラを出している。というより表情に出ている。

リユーも表情が変わるようだ。

シークは無表情。

リユーの顔を見ると、少し嬉しそうだった。

となると…今はシークがババを持っている事になる。

アディがシークの札を引くが二人とも無表情。

アステルがアディのカードを引いた。

アステルの表情が曇る。

ババはアステルが持っているようだ。

スイカはアステルの持ち札を迷っている振りをして、手を全てに回して表情を伺った。

表情に変化は無かった。

とりあえず、一番右のカードを引いた。

同じカードを捨て、リユーに引かせる事である。

優勝者：スイカ。

リユーも持ち札は3枚になり、真ん中のカードをシークが引く。

シークも持ち札一枚になり、あがる。

アディはシークから引いたカードと同じ数字のカードを捨てた。

アステルはアディからカードを引いて同じだったカードを捨てる。

リユーがアステルからカードを引き、表情を曇らせた。

そんなジョーカーの取り合いが始まり、結局最下位はリユーとなった。

スイカはリユーに命令を下す。

「明日、明後日、明々後日の3日間、騎士団との戦闘以外は全てリユー任せる。取った金は山分け。ただし俺が三分の一貰う」

「そんなんでいいのか？」

「いいんだよ」

次のゲーム。

「あがりです」

アステルが勝った。というのも始まる前にカードがなくなっていた。

「あがり」

シークがあがった。

「あがり」

アディがあがった。

「あがり」

リユーがあがる。

最下位はスイカ。

「今日入れて4日間宿代を払ってください」

「わかったよ」

3回目が長引き、罰ゲームの存在を誰もが忘れてしまい、ただゲームを皆が楽しんでいた。

第三十一話 脱獄！誓駆は完全に犯罪者！

数日が経った。

港町から東に行き、大陸の中でも屈指の大きさの都市にいる。

その都市の中のとある場所…牢獄。

勿論スイカ一人。

何故牢獄にいるのかというと…

時刻は二時間ほど遡る。

都市に着き、スイカ達は適当にブラブラしていた。

最初は下町をウロウロしていた。下町は、身分の低い者達が暮らすところであつたが、活気があり、身分が低い者達だとは微塵も感じさせなかった。

とりあえず露店、武器屋、食材屋をスイカたちが見て回っていたときだ。食材屋の店主から広場の方に人が集まっていると聞き、広場の方へと向かった。

広場では騎士団と下町の住民が言い争っていた。

その様子を見ていただけなのだが、騎士団の一人が公衆の中からスイカを見つけ、言い争いをやめてスイカの方へきた。スイカはそこで撃退をするつもりだったが、住民がいるため、撃退をする事が

出来ず、捕まってしまった。

く回想終了く

牢獄に入れられて早1時間。

見張りの数は五人から三人へと減り、更に警戒心が薄れてきているため脱出を試みた。

勿論静かに脱出など不可能であった。風で刃を作り檻の鍵の部分を切る。檻がはずれ、スイカは外へ出た。

見張りには檻が開く音を聞き、こちらへ来たが、気絶させて《蓮華》を取り返した。

牢獄から脱出し、とりあえず進む。

勿論牢獄と言う事もあり、地下に作られていた。上へと繋がる階段を上がると、いきなり外の開いた土地へと出た。しかし…

待つてましたといわんばかりに騎士団が待ち構えていた。その数およそ百五十人。

蓮華を鞘から抜き、騎士団の中へと突っ込む。

騎士団の前ところで跳躍し、上から襲う。

《風襲刃》

ちょうど真ん中に着地し、その場で風で刃を作る。

風で作った刀を左手に持ち、二刀流となる。

勿論、風作った刀は見えない。作った張本人であるスイカにも見えない。

そこで踊るように騎士団を切りつける。

《奥義其の式 風乱舞》

両手の刀で騎士を切りつけながら、《風刃》をあちこちに飛ばすことで騎士団はかなりのスピードで減っていった。

最後の一人を切った後、この開いた土地は地獄絵図と化していた。

急所は全員外しているが、血が出ていない騎士はいない。

スイカの着ていた白い服も今や返り血で真っ赤。

仕方なく、箱から服を取り出し、着替えた。

そして、とりあえず下町へと戻って行った。

下町に着くと、俺の姿を凝視するなり近づいてくる無邪気な少年達
がいた。

「どうやって逃げてきたの？」

「兄ちゃん勝負しよ！」

「兄ちゃん戦い方教えて！」

など少年達が寄ってくる。

少年達の他にも、いろんな人が集まった。

気付けば下町の注目の的になり、若い人と組み手をしたり、少年達とチャンバラをしたりと普通に楽しんでいたのだが、リユー達もスイカを見つけた。

アステルがスイカを見つけ駆け寄って、言った。

「脱獄がバレました！騎士団もすぐここに来ると思います。街の人たちを巻き込みたくないですし、ここから更に東に行きましょう。森がありますし、そこで撒けると思います」

「ああ！」

そうして、下町の住民に見送られながら、スイカ達は東の森に向かった。

第三十一話 脱獄！替駆は完全に犯罪者！（後書き）

六月に入り、文芸誌の締め切りが迫ってきました。更に2週間後にテスト：

などの理由により、六月は一週に一話しか更新できません。新作についても同様です。

これからもオーエンよろしくお願いします。

感想もお願いします。

第三十一話 魔物の襲撃再び！

スイカ達は、都市を出て東へ向かっていた。

「スイカ、お前どうやって逃げたんだよ」

「普通に見張りを斬って逃げてきた」

「殺したのか？」

「殺しはしなかったが、返り血とかはすごかった」

「そうかー。お前もう完全に罪人だよなー」

「好きでなったわけじゃない」

などとリユーと話していた。

「でも、その犯罪者と行動してる私達も…」

控えめにアデイが言った。

「……………」

「何でそこで黙るの？」

「そんなの下手したら僕達も罪人扱いされちゃうからだと思っよ…」

アデイとアステル、シークも会話に参加してきた。

会話をしながら、歩いていると町が見えてきた。

「どうする？寄って行くのか？」

「どうしよう？」

「僕は寄らない方がいい…とは思わないけど…」

「私も寄りたい」

「腹減った」

満場一致と言うわけではないが、昼食のために寄る事にした。

町の飲食店へ入り、注文をとる。

皆が急いでいるため手軽に食べれる物を選んだ。

勿論だが麺類。安くて、早くて、尚且つ食欲を満たす事の出来る食べ物。

昼食を食べ終え、飲食店を出た。

飲食店を出た後、スイカたちは町を出ようとした。

しかし、街の外には再び魔物。

前とは違い、リーダー格の大きなクマ型の魔物と、通常の狼型の魔物の大群。

見つかる前にスイカたちは少し引き返した。

「やっぱり…俺不幸だよなあ」

スイカが溜息をつきながら言った。

「スイカには何か絶対憑いてるよね」

シークも呆れ顔で答える。

「好きでこんな不幸三昧になったわけじゃない」

などとなにやらくだらない事をスイカとシークは話している。

「あの…気になることがあるんですけど…」

そんな中アステルが控えめに言う。

「なんだよアステル？」

「反対側の街の入り口の方にも魔物はいると思うんですけど…」

「「「……………」」」

「よしじゃあ分かれなさいけないなー」

「向こうはスイカさんに任せます」

「向こうはスイカだよな」

「向こうはスイカがやるべきだと思う」

「向こうはスイカに任せるわ」

「……何で俺だけ？」

「……人外だから（です）」

「分かったよ……」

反論は無駄だと悟り、スイカは承認した。

「じゃあ頑張つて。任せたから」

それだけ伝えるとシークたちは、魔物の群れの方へ向かった

「あれ？ここって心配されるところじゃないの？」

「……………」

シークたちは既にいない。

「チクシヨオオオオオ！！」

スイカは絶叫してから全力で街の反対側へと向かった。

街の反対側に二十秒もかからず着くと、《蓮華》を抜いて魔物に向かって言った。

「日頃の鬱憤をここで晴らしてやる！全員まとめてかかって来いやああああ！！」

スイカは魔物の群れへと走っていった。

第三十三話 VS 魔物の大群

スイカが叫んだ事により魔物の群れは一斉にスイカを襲う。

スイカは日頃の鬱憤を晴らすためほぼ本能的に動いており、風でまとめて片付けるといふ事をせず、二刀流の剣技のみで魔物を切り刻んでいた。

風の刀や<蓮華>を振っている姿は綺麗な舞踊のようにも見えなくもない。

しかし、カマイタチが飛んでおらず、ただ斬っているだけだった。それでも魔物の死体の数が増えていく。

右の魔物が斬られたと思えば左の魔物も斬られている。狼型の魔物がスイカを襲うが、そこにスイカはおらず、逆に後ろからスイカに襲われるという現状。もはや地獄絵図だった。

スイカは魔物を斬りながら、リーダー格の魔物の元へ近づいている。複数の魔物がスイカを囲んで一斉に襲うが、スイカは瞬く間に襲ってきた魔物を斬った。

数分後、リーダー格の魔物以外はスイカに斬られた。

残るはリーダー格のみ。

「グルルルル」

巨大な熊型の魔物は唸る。

スイカは、熊へと近づく。

先手を取ったが、熊にかわされ、逆に鋭い爪で襲われる。

それを避け、また仕掛ける。避ける。の繰り返し。

発狂（？）しているスイカは風を利用するという事をしなかった。

ただ魔物へ向かい、そして避け、仕掛ける。

そんな事を延々と続けていたのだが、スイカはスピードを落とすどころか上げた。

流石に避けられず、魔物は切られた。しかし、次の瞬間には魔物がスイカを襲っていく。

少しずつだが、魔物は傷を負ってきた。スイカは無傷。

しばらく交わす仕掛けるを繰り返していると、魔物はスイカに左腕を斬られた。

「グウウウウウー!!!」

魔物は怯み唸った。その怯んだ隙に、スイカは魔物の首、腕、胴を切り離した。

魔物の群れは全滅し、残ったのは死体の山。血。そしてスイカのみだった。

その中でスイカは自我（？）を取り戻した。

「片付けるか…」

そう呟き、風を起こして死体を森の方へと吹き飛ばした。

向こうはどうなっているのだろう。

そう思いながら、返り血で真っ赤に染まった服を着替えた。

血で染まった服を着替えた後、街の反対側へと向かう。

街の反対側に着くと、リーダー格の魔物をリユーが殴ってトドメを刺していた。

その後、思わぬタイムロスがあったためスイカたちは森へと向かって走り出した。

しばらく…と言っても一時間以上走り続けた。

「ここまで来れば追いつかれる事は無いと思うんだが」

全く疲れていない様子のスイカが言った。

「そうだね…」

少し疲れたような顔でシークが同意。

「この辺でいいよな」

リユーは全くとはいわないものの疲れた様子は無い。

「私もこの辺で…」

明らかに疲れたような顔で二人は言った。

と言うかもとより全くペースを落とさず、むしろ上げていくように走り続けていられるのは、人外もしくは化け物だ。

「歩けるか？」

「歩くのなら問題ないです」

「何とか歩くくらいはできると思うわ」

「歩けるよ」

「まだ走れるくらいだ」

全員が歩けるらしく、休憩をしないで歩く事にした。

「そう言えばよ、スイカはあの大群一人でやったんだよな」

「ああ。あいにくどうやったか殆ど覚えてないがな」

「どうしたらそんなに強くなれるんだよ？」

「かなり小さいときから修行してきたからだろうな」

「どれくらいからなんだ？」

「五歳より少し前からか…物心ついたときには刀を持ってたくらいだからな」

「そんな前から修行やってたのか…」

「ああ。それでも家の兄貴のが強いけどな」

「まだ強いやつはいるのか…」

「前にも言ったが、これから強くなればいい」

「そつだな！」

そんな会話をしながら、森へと向かった。

第三十四話 手合わせ

森の中は、大量の木々により日の当たりがなかった。おまけに一本道ではなく道が入り組んでいる。

「これは…下手したらこっちが迷っちまうな…」

「そうですね…」

迷わないように気を付けながら…進んでいるつもりだったのだが、進めているのか分からなかった。

しばらく歩き、森に入って何度目かの分かれ道に出た。

「そっち。通ったところだろ？」

リユーが突然口を開いた。

「「「「は？」「」「」」」

全員が声を合わせる。

「だ〜か〜ら〜そっちは通ったんだって」

「何で分かるの!？」

シークが驚嘆に満ちた顔で訊く。

「う〜ん。なんか見覚えあつたんだよな…」

それから、リユーの不思議な能力により、森を無事に抜けた。

ちなみに、何度か巨大な虫に遭遇し、スイカが発狂したというのはまた別の話。

「森を抜けたのはいいが…これからどうするんだよ？」

騎士団を撤く事が目的だったため、目的地はない。

「ここから東に行ったら、村があるみたいだけど…」

地図を見ながらシークが言った。

「とりあえず目的地はそこでいいか」

目的地も決定し、村へと向かう。

森を出て、小一時間程度で村に着いた。

この世界に来て最初に訪れた村…トリイ村と雰囲気も外見も殆ど変わらなかった。

「さて…これからどうする？」

スイカは全員に訊いた。

「宿を取つとかない？部屋取られたりしたら困るし」

「それもそうだな……」

まだ夕暮れも訪れていないが、宿へ向かい予約。

宿の予約が終わり、全員が別行動をすることになった。

スイカは、リユーの修行に付き合うことにした。

「リユー。修行するか？と言っても手合わせとかだかな」

「いいのか！？」

「特にやることないしな」

「じゃーやるか！」

やけに嬉しそうに、跳ねている。

村の真ん中だと迷惑がかかることは明白。よって、村のはずれへ向かった。

「ここなら迷惑とかが、かからないだろ」

「じゃあ…やるか」

スイカはリユーから手袋グローブを受け取り、手に嵌めた。

「今回は、時間があるから…少しやり方を変える。片方目隠しをし

て手合わせだ。ちなみに今回は手加減しないからな」

勿論ハツタリ。本気を最初から出すつもりは無かった。言った目的はリユーのやる気を底上げさせる為だ。

それでもリユーは策にはまった。やる気に溢れている。

(うーん…まあ…70%ぐらいの力でやるか)

ちなみにいつもは40%ぐらいの力で手合わせをしている。

リユーは右目を塞いでいる。

スイカは片方目隠しをした状態で更にもう片方の目も塞いだ。つまり、頼れるのは気配のみだ。

「「スタート
開始」」

スイカの視点は暗い。しかし、気配でリユーの動きは丸見え。

上段蹴り。

それを後ろに飛んでかわし、足のばねを利用して思い切り突進し、掌底を放つ。

掌底は避けられたが、それも計算済み。避けられた上で回し蹴りを放つ。

回し蹴りを喰らい、リユーが吹き飛ぶ。

ガードされたのは分かった。そのうち反撃してくるだろうとカウンターの構えを取る。

そのまま互いに硬直。警戒して動けないリユーと動くつもりの無いスイカ。

静寂が訪れ、緊張感が増していく。その静寂を破ったのはスイカだった。

スイカがリユーに向かって走っていく。

リユーは迎撃の構えを取るが、無意味だった。

カウンターの動きをする前に、スイカの攻撃が届く。

リユーは吹き飛び、木に身をしたたかに打った。

「ぐっ!!」

リユーは少しの間気を失った。

「起きたか？」

リユーの近くには座って休憩しているスイカがいた。

「ああ……」

まだ激痛は治っていない。

「わかったか？あの技がどういうものか」

「カウンターの隙すら与えない超スピードで殴ったんだろ」

「正解。あの技は《紅蓮彗星》ってんだ。元は兄貴から教わった技だが…一応教えとくのも悪くないからな」

「教えてくれるのか!？」

「ああ。ただ…結構きついぞ。今からお前の腕で…ざっと1〜2時間だな」

「結構短いんだな」

「馬鹿。1〜2時間で習得できるほどスパルタでやるって事だよ」

そして…スイカはリユーに《紅蓮彗星》を授けるため、修行を始めた。

第三十四話 手合わせ（後書き）

ずいぶん遅れてしまいました…

かなり設定もぐらついて…大変です。が、頑張ります。はい。

←

やっぱり無理です。続けるのは…話がおかしな方向に行きますし、設定が更にぐらついていきますので…
でわ。

また次回作で…

*この小説を再構成するかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7764g/>

異世界な物語

2011年11月16日17時53分発行